
紅と蒼色の幻想 ~時空を越えた戦い~

鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅と蒼色の幻想 ～時空を越えた戦い～

【Zコード】

Z8647L

【作者名】

鐘

【あらすじ】

剣術をやつてる以外 『よく普通の中学生生活を過いで』していた
井上蒼馬 兄との修行を終えて部屋に戻ると自分の部屋に無いはず
の鏡が

置いてあつた！？ 除きこんだ瞬間！鏡の中に入ってしまった！
いきなり現れた女神様から世界を救つてと言われ

アニメ好きの蒼馬がアニメの様な世界を救う物語です！
終わりが見えませんが・・よろしくお願ひします

どこかの話からアニメやゲームキャラが転移してたりして・・・。

アニメ好きな蒼馬がアニメの技を使用したり・・・
最初のほうは・・・面白く無いかもです・・・

キャラクター紹介

本作品のキャラクター紹介です

井上蒼馬（主人公）（男） 属性 炎&水

年齢 14歳 誕生日 4月19日 171cm

私立飛辺煌法大附属中学二年生

武器 長刀 紅蒼閃刀 短刀 狼蒼疾風

好きなもの 刀 アニメ

嫌いなもの 辞書 めんどくさい人

趣味 アニメ鑑賞

解説

マイペースで激情家 心の中でツッコミが得意

紅桜蒼天流 九代目当主 剣術が得意

兄貴と二人暮らしで両親は蒼馬が幼いころに旅で出て行方不明
あまり人とは接しないが人のピンチには、すぐ駆けつける
覚醒すると髪の毛と瞳の色が紅色になる

パートナーは空馬

空馬 属性 風

魔力生命体（女）

年齢 不明 誕生日 不明 154cm

武器 「輝きを持つ変化結晶体」^{クリスタルラーン}

好きなもの 可愛い動物 宝石

嫌いなもの 昆虫 悪い人

解説

お調子者だが腕は確か 覚醒合体能力 治癒能力

髪の毛は黄色 瞳は緑っぽい黒！？

転移能力ができる

キャラクター紹介（後書き）

作者 「今日はメインキャラクター一人の紹介でした」

蒼馬 「他に何人程キャラいるんだ?」

作者 「まだ最後まで考えてないから・・分からない・・^_^;」

蒼馬 「読者さんに気に入つてもらえるような小説作り頑張れよ」

作者 「はい!頑張ります」

蒼馬 「おっヒーそろそろアニメの時間だ!」

作者 「では次回から本編に突入しますので」

作者 「まだルピ?とかそんな感じの使い方もよく分からず・・・」

作者 「小説投稿も初めてですが・・・」

作者 「いい作品作れるように頑張ります 次回もよろしくです」

第一話 時の始まり

「グhaar！・・ウギヤ！・・ガhaar！」

「おいおい、それでも紅桜蒼天流・九代目当主か？蒼馬！？」

「なあ、兄さんよ、なんで俺が紅桜蒼天流・九代目当主なんだ? 別に他の人がやつても良かつただろ?」

（紅桜蒼天流・九代目当主になつてしまつた不幸の蒼馬こと・・・
井上蒼馬・・なんで剣術やらなきやいけないんだ？）

「そりや～お前だからだう？」

(意味分からないよ！なんで俺だからなんだ？)

「あの、まつたく意味が理解できないのですが……なんで俺だから九代目なんですか？」

「それ以上無駄口たたくなら・・・・フフフへへ」

「すいませんでした！！紅桜蒼天流・九代目当主！井上蒼馬
これからも日々精進して頑張ります！！」

剣術も言葉も弱い蒼馬・・・時刻は7時・・・修行終了の時間だ

(そろそろ修行終了の時間か~やつと終われるぜ)

「兄貴、そろそろ終わりの時間だぜ」

「何を言つてゐるんだ？弟よも～もう少しぐらう修行するだー。
そのぐらうやんなきや・・・弱いままだぞ・・・」

(まじかよ！・・・無理無理～何か・・・いい手は・・・そうだ！)

「兄貴～そろそろボーモンの時間だぞ～いいのか見なくて?
兄貴の好きなアニメだぞ」

「しーしまつた！忘れてた！今日の修行はここまでだー！」

(フー勝つた・・・・・)

兄は急いで道場から出て行つた・・・疾風の如く・・・

修行を終え部屋に戻る蒼馬・・・すると部屋にあるはずの無い
不思議な鏡が置いてあつたのだ・・・

「なんだ？この鏡・・俺の部屋に置いてあつたか？兄貴のかな？
でもなんで俺の部屋に兄貴の鏡が・・？」

と誰のか確認しつつ触つてみた

・・・・・すると！
・・・・・なにもなかつた

「なんだよ！すげ～期待しちまつたじやん！
まあちゅつとだけ・・寝るかな」

と蒼馬がベットで横になつた瞬間！

(ー・? なんで鏡が光ってるんだ??)

蒼馬は鏡の触れてみた・・・

「嘘だろー? 鏡の中に手が入つただとー? 仮面ラ ダー
?」

なんとー鏡の中に手が入つてのだ! そして・・・

「おーおーおー! ひ・・・引きずりま・・あ〜〜・・・」

蒼馬は体全体鏡の中に吸い込まれていった・・・
そして・・蒼馬が目を開けると・・そこはー

(なんだここ・・・ 周りも何かも真っ白世界かよ・・・
一体ー? はどー? 夢なのか?)

「ここにちわ 「

「だ・・誰だー?」

第一話 時の始まり（後書き）

作者「ダメダメだな・・・〇一」

作者「内容考えてて5話くらいからはいいだけど・・・」

作者「最初のほうは内容思い浮かばないw」

作者「しかし頑張らないと」

作者「アドバイス 感想など待ってますm - - m」

作者「次回もよろしくです」

第一話 運命（前書き）

いつもです m - - m
前回と少し書き方が違います^ ^;
よろしくお願いします

第一話　運命

「こんにちわ　」「
だ・・誰だ！？」

突然背後から声がしたので向いてみると・・・
女の人が立っていた・・・

(だ・・誰なんだ？この人・・・)

「ど、どなた様でしようか？」

「女神様です　」

「・・・・・はい？」

(ん～と・・女神様？・・この人大丈夫か？)

「え～と[冗談はやめてください」

「冗談では無いですよ～私は本物の女神様です　」

女神様なんて・・この世に存在するのだろうか・・
なんて考えながら蒼馬は質問した

「え～と女神様ここはどこですか？」

「現実の夢の狭間です　」

「現実と夢の狭間？なんですか？それ」

意味不明な言葉に焦る蒼馬それから女神様から
いろいろと詳しい説明を聞いた

「つてな感じです」

「俺の部屋に戻してください」

「あなたに頼み」とが・・・

「戻してください」

「あなたに・・・

「戻してください〜！」

「黙つて人の話聞けや！小僧！」

「すいませんでした！！！」

(怖いよ～女神様怖いよ～もの凄い黒いオーラが・・・
女神様つてこんな怖い生き物だつたのか・・・)

「あなたにロギアーヌを救つてもらいたいのです!」

「ロ、ロギアーヌ？どこですかそこ？」

「行けば分かります！では！頑張つてください^ ^ノノ」

「え！？強制ですか・・・え〜〜」

蒼馬は光に包まれ前が何も見えなくなつた・・・
・・・・・気がつくと・・・

「ここのは・・・どこだ？ロ、ロギアーヌつてどこかな？」

周りは爆発後のマンジョンのように今にも崩壊しそうだった
周囲は燃えていて地割れも起きている・・・

(おいおいーいきなりの死亡パターンですか！？あれ?
あれは・・・女の子か！？あの場所は危ない！）

少女の真上から岩が落ちてきたのだ

「くそー！ しょうがない・・・ 紅風車へ疾風！」

ドゴオーラン！

抜刀と同時に放たれた斬撃で岩は粉碎されたのだった・・・

兄

「あれ？ 蒼馬がいないな・・・ あいつの部屋の刀2本無くなってる
し・・・
まーまさか家出か！？ ・・・ あの馬鹿者が・・・」

と

鏡の存在に目も触れず兄は蒼馬が帰つてくることを
特に心配せずに・・そのまま寝てしまつた・・・

蒼馬

「おい！ 大丈夫か？ 怪我は・・・ 特に無さそうだな」

「ありがとう お兄ちゃん」

「ああ」とにかく！ ここから脱出しよう！ 走れるか？ 「
えーと・・・」

少女は下を向いて何か考えていた・・・

「お母さんが知らない人についていつたらダメー！ って言つてた！」

(なに……)の状況で・・まさかそのセリフが・・・
ど、どうする?のままダメだし・・・

「い、今知り合った!だから行こう!」
「ちょっと待ちなさい!…!」

? ? ?

「誰か? 誰か居ませんか?」

(もう人はいないのかな?・・・もうちょっと奥まで行つて見ようか
な・・・)

すると男の子と女の子に連れられそつなのを発見した

「あーあれは!助けないと…!
ちょっと待ちなさい!…!」

蒼馬

「だ・・・誰ですか!?」

「空間管理局 空戦隊 一等空士 雪村有紗!その子を渡して!」

「ぐ、空間管理局?なんだそれ?」

「そんなことはいいから誘拐犯!その子を渡しなさい!」

(誘拐犯!?)お・・・俺誘拐犯扱いされてるし…
ただ助けようとしてるだけなのに…)
ただ助けようとしてるだけなのに…)

「俺誘拐犯じゃないですよ!ただ助けただけですよ…」
「言訳するのなら・・・覚悟はいい?武器を捨てないのなら・・・

「え？え？そ・・そんな・・しょ、しょうがない！」

つてな感じで
戦闘になつてしましました・・・成り行きつての・・・
とつても怖いです・・・

「じつちから行くよ！！」

「ストリームバスター準備OK？」

「マスターいつでも」

(つ・・杖がしゃべつた?・・・ビリのアニメだよー?)

「エクシード・・・ブラスター！…！」

黄色のビームみたいなのが飛んできた・・・

(お~お~い~どこのモビースーツだよー?)

「ゴーイプですか?あいつはー!」

なんとか回避に成功した蒼馬

しかし!

爆風で蒼馬ふつとんでしまった・・・

「な~なんだよ~あれ・・・反則だろ・・・ならじつかも・・・」

「蒼狼天一閃!…！」

「高速の抜刀で3つの斬撃をとばす技だ!~そつ簡単には!~」

「ストリームバスター!モード・・・グレーナル!」

「OKですマスター」

突然相手に持っている杖が変形して槍の形になつたのだ

「アクセルストーム……」

もの凄い速さで突進してきた蒼馬は反応し切れずかすつてしまつた反射神経だけで動いた蒼馬に今の動きは完璧に見えていなかつた・

「な・・なんだ今のは速かつた！追いつけないな・・・
どうする・・・そうだ！女神様から貰つたパートナーカードヒヤ
らで！」

女神様からロギアース救出を頼まれた蒼馬

女神様からパートナーとして魔力生命体のパートナーをもらつた
のだった

今！それを使うとき！

「でてこい！・・・名前は・・空馬！……」

パートナーカードから20cmほどの妖精が出てきた

「お、お前が俺のパートナーか？頼むあいつを倒す術を
教えてくれ！」

「はい マスターが言うならばーあれば長距離タイプの魔法使いで
すね

近距離専門っぽいマスターなら大丈夫なのでわ？」

「それが無理だから呼んだんだけど・・・頼む！」

(今までに戦闘見たのか?長距離専門とか・・・)

「武器ゴニゾンしましょー!武器と私の合体技です!」

「それで倒せるのか?武器ゴニゾンつてやつで・・・」

「マスターの魔力なら20分は大丈夫でしょう・・・今から言ひ」と

を実行してください」

空馬から武器と武器との合体のしかたとゴニゾンのやつ方を
教えてもらひながら逃げていた・・・

「よしー・・行ぐぞ!紅蒼閃刀と狼双疾風と合体させゴニゾンだ
るー?」

「はい!マスター!行きますよー!」

「武器ゴニゾン!ー!」

その言葉の後武器の中の空馬が入っていき
一つの武器を合体させた・・・そして
一つの刀が完成したのだ!

「紅桜蒼穹刃!ー!」

第一話 運命（後書き）

作者「いきなりの戦闘です・・・普通のシーンも書くのがへたなのに・・・」

戦闘シーンだなんて・・・無理ですへへ・・・どうだったでしょ
うか？

戦闘ってより・・・説明やら技やら・・・そんな感じでしたね次回は
もっと面白い戦闘シーン・・頑張りますm - m
最後まで読んでくださいありがとうございました

次回もよろしくお願ひしますm - m

第三話 神召喚者ベル（前書き）

いつもです m - - m

前回はパートナーの空馬に武器ゴービンのやり方を教えてもらい
実行ですねえ ^ ^

蒼馬 V.S 有紗 です ^ ^

第三話 神召喚者ベル

「よし・・・行くぞ！紅蒼閃刀と狼双疾風と合体させてユニゾンだ
る！？」

「はいマスター！行きますよ！」

「「武器ユニゾン！—」」

一いつの武器が重なり・・その中に空馬が入つていった・・・
武器が輝き一本の長刀が完成したのだ！

「紅桜蒼穹刃！—！」

これが・・武器ユニゾンかスゴイ力を感じる
空馬が言うには俺の魔力値が上がれば武器はさらに
強くなるそうだ・・・

「やつと見つけたよ誘拐犯君・・パートナー出して逃げるだなんて
でも・・・もう逃げられないよ！」
「もう逃げる必要は無い！行くぞ！」
「こっちも行くよ！ストリームバスター！…モード・・ショーティ
ング！」

相手の武器が変化し もの凄い勢いで魔力を貯めはじめる

「これが・・私の必殺技！行くよ！—！」
「俺だつて・・・行くぞ！—！」

お互ひの一撃必殺・・決まつたほうが・・・勝つ！

「シュー・ティングスター！ブレイカー！！！」

! ! !

もの凄い量の魔力の砲撃がとんできた・・・。
くそ！・・・どうする！？

「私の・・・勝ちだよ！」

「まだだ！？」

(エリザベスが聞いてたやつーこだるか？)

（はー！ いつでもOKですー。）

(転移魔法陣！起動！5秒後に転移します！)

四九

俺の立っている場所に魔法陣ができた・・

「5秒か・・・ギリギリ間に合うか・・・」

もの凄い遠くからとは言え

シュー・ティングスター・ブレイカーは・・速い！

(5秒経ちました！転移します！)

「決まつたね！私の勝ちだよ！！」

ドーハ――ン――!

地面に穴が空くようなもの凄い威力・・・あれを喰らつてたらと思つと・・・考えたくない・・・

「俺は・・・ここだ！」

「う、うそーなんで後ろに！？」

「これで・・・とどめだ！」

「蒼天破一閃！…」

一瞬で相手の懷に飛び込み抜刀で決める・・・と思った瞬間！
俺と有紗は何者かによつて吹き飛ばされた

「なに！？」

「だ・・・誰！？」

「君達はこの物語で重要な人達なんだ 死んだらダメだよ」

黄色の髪の少年がことりに向かつてそう言った・・・

「空間管理局の女の子・・その人は誘拐なんかしてないよ
「女の子を助けただけだよ」

(そのとおり！…救世主キタアア～)

有紗は何も言わず黙つている・・・

「あなたは・・・神召喚者ベルですか？・・・
「・・・よく知つてるね・・・」

(ベ・・ベルですつて！？そんな・・・
(空馬知つてゐるのか？・・ベルつて・・)
(この世の中で今のとこもつとも強い人です・・・)
(な！なんだつて！？)

「何故あなたがここに？殺しにきたのですか？」

「違うよ 次元の使いの実力をね・・・」

「じ・・次元の使い誰ですか？」

「そこにいる・・・井上蒼馬君だよ」

「俺が次元の使い？なんだそれ・・・」

俺は女神様に頼まれて・・・ってそれが

次元の使いってやつなのかな？実力をつて・・・

「こーこの人は次元の使いなんですか！？？」

「そうだよ」

「蒼馬さん・・・逃げましょう・・・殺されます・・・

二人では勝ち目がありません・・・あなたが次元の使いなら・・・
お守りします！」

次元の使いってそんなスゴイのか？

でも・・・逃げたほうがいいな・・・

あのベルつてやつ・・・威圧感が凄すぎる・・・

「待たないよ！行くよ！」

(空馬！全力魔力で転移だ！一人転移いけるな！)

(はい！そう遠くまで行けませんが！1分もたせてください！)

「おい！有紗つてやつ！転移するから一分逃げるぞ！」

「え！？あ！うん！逃げるよ！」

「逃げさないよ！」

万事の王 その名の力と源に

全を滅するは地の光 無を滅するは天の光

天地の光 魔弾の邪王！」

「天魔邪天砲！！」

一瞬だつた・・俺達の隣にあるビルが・・
そこになかつたかのように消えたのだ・・

「あ！あんなのありかよ！反則並みだろ・・

「とーとにかく一分時間を！」

逃げるか？戦うか？どちらにせよ一分もたせる自身は無い・
・・・戦うか・・・

「紅時空両断！」

「遅い！そんな攻撃・・見切れるよ・・

「そーそんな・・・」

刹那の抜刀術だつたはず・・・なのに！何故・・
回避できただんだ！？

「それじゃ・・・実力を見せてもらうよ・・・」

第三話 神召喚者ベル（後書き）

作者「ご感想ありがとうございました」

作者「蒼馬君死亡フラグだね・・・」

蒼馬「まだ死にたくないぜ・・・」

作者「頑張ってくれ 応援してるよ」

蒼馬「お前が言えることか・・・」

作者「まあとにかく次回も頑張りますのでよろしくです」

第四話 空間管理局（前書き）

有紗と蒼馬の戦闘に乱入してきたベル・・

蒼馬の実力を見極めると言つている

転移するまで一分間・・耐え切れるのか??

第四話 空間管理局

「実力見せてもらひつよ・・・」

ベルがそう言つた瞬間ベルの両手に魔力が集められた

「行くよ・・メルトクリムゾン！」

「くそ！舐めるなよ！蒼龍天王斬！..！」

ベルの両手から二つの紅い弾

蒼馬剣から蒼い龍が・・・

激突した！！

ド、「オーーーーン！！」

もの凄い爆発が起きた・・・

「い、今のが限界かな・・魔力が・・・」

（マスターこちちらに魔力反応！..）

（まだくるか！..）

「まだ序章だよ！朱雀炎舞！」

ベルは両手に炎をやどすと踊るように攻撃してきた

・・今の俺では耐え切れない・・

「エクシードバスター！..」

「へえ～君も戦うのかい・・・・」

有紗のエクシードバスターを簡単に避けると
ベルは有紗に向かつて突撃していった・・

(マスター 転移準備完了！転移魔法陣発動！)

(よし！ いけるか！？)

(有紗さんを魔法陣の中へ！…)

「よし！ 有紗！ 魔法陣のなか・・へ・・」

有紗のほうを向いたが・・すでに有紗はこちらに
吹き飛ばされていた・・・ベルによつて・・

「いいよ お疲れ様・・君の実力も分かつたしね その子は氣絶し
てるだけだよ^ ^」

「俺達を逃がしていいのか？・・・」

「実力を見に来ただけだからね・・・」

「次は負けない・・・」

俺はそう言つて転移魔法を発動させて消えていった・・

「・・・楽しみにしてるよ・・井上蒼馬君」

(マスター転移完了しました)

(ここは・・どこ?)

「空間管理局本部アルカチアスだよ」

「あ、有紗・・大丈夫なのか？？」

「う、うん・・大丈夫・・転移してなかつたら危なかつたね」

そう言つて話ていると奥のほうから数人の人達が走ってきた

「有紗！大丈夫！蒼馬君！転移してくれてありがとう！」

「あ、いえいえ・・・」

「皆、大丈夫だよ！それより・・・」

「そうだね・・・」

すると全員がこっちを向いて有紗が言った

「蒼馬君いろいろとお話あるけど・・・いいよね」

「え？ああ～はい」

俺達は奥のほうにある部屋に入った・・・

「ベルとの戦闘見させてもらいました・・・次元の使いだそうね？」

「そうらしいですね・・・」

「单刀直入に言います・・・空間管理局に入りませんか？」

「え！？」

驚いた・・・いきなりすぎると・・・

「失礼私はアレックス・ローリー空間管理局の管理長よ」

「え・・・あ！井上蒼馬です よろしく・・・」

「井上蒼馬君・・・やつきの質問の答えは・・・」

（どうする・・・空馬・・・）

（行く場所も無いならいいのでは？ロギアースを救うなら・・・ここを拠点にしたほうがいいかもです）

（そつか・・・）

「いいんですか？見ず知らずの人をいれば？」

「あなたの実力は見せてもらつたわ・・すごい剣術ね」

「ありがとうございます・・」

「空間管理局は人数不足なのよ・・いいかしら」

「そちらがいいのであれば・・・お願いします」

「決まりね！改めて！ようこそ空間管理局へ！」

こうして空間管理局へと入隊したのだった・・・

第四話 空間管理局（後書き）

作者「空間管理局入隊おめでとう」

蒼馬「んまあ～ありがと」

作者「次回は管理局の詳しい説明と部隊説明かな」

蒼馬「なんかスゴイ急展開だな・・・いいのか？」

作者「・・・いいんじゃない？　ｗｗ」

蒼馬「いいのか・・・」

作者「うん！」

作者「感想ありがとうございました～～次回もよろしくです」

第五話　陸空試験戦闘（前書き）

突然空間管理局への入隊を頼まれ
入隊をOKした蒼馬
有紗・アレックスに管理局の説明を受けていた・・・

第五話　陸空試験戦闘

「空間管理局は主に3つの部隊に別れているわ

「戦闘部隊・補助部隊＆医療部隊・オペレート部隊だわ」

3つの部隊

戦闘部隊　主に前線にて敵を殲滅する部隊　陸・空・空間の3つの部隊がある

補助部隊　戦闘部隊の回復と補助や情報収集が仕事

オペレート部隊　現状を伝えたり　機会での仕事が多い

「もちろん　戦闘部隊に加入してもうつわ・・・」

「はい・・・」

「部隊は今から試験戦闘をして決めさせてもらいます」

「試験戦闘」

試験戦闘

部隊を決めるため　陸・空・空間で戦闘を行い
動き　魔力値　戦闘に仕方を見ること

「では明日の朝8時から試験戦闘を行いますー寝坊はダメだよ」

「はい！お願いします！」

「部屋は用意しといたから　そこを使ってね

「ありがとうございます」

俺は部屋に戻つて明日のことと・・それからのことを考えた

（成り行きつて凄いな・・・）

（マスター明日の相手は　有紗さん　フェルガ？さん　らしいです）

(確か・・音速のフェルガだっけ?)

(とても強いらしいですよ)

(頑張つてくださいね もう寝てください)

(ああ・・・・・)

俺は明日に備えて寝ることにした・・・

(マスター～マスター～7時です～起きてください)

空馬の声で起きると・・・もつ7時だった

「よく寝たな・・・でも眠いな・・・」

(今日は試験戦闘つてやつですね 頑張りましょう)

(ああ・・・まあ無理しない程度に)・・・

俺は試験の準備して試験場所に向かった・・・

「おーきたきた蒼馬君 おはよー」

「ああ・・・有紗おはよう・・・ついては・・・

「最初は空の試験相手は私だよー」

「まあ前回の決着かな・・・」

「負けなによー」

「お一人とも戦闘準備をお願いします

「はい」

(「ひでやるのか・・・・・)

真ん中に島っぽいのがあるだけで・・・他は空か・・・確かに空の試験つてやつだな・・・

「ルールは簡単 魔力切れか気絶だよ

「わかつた・・・」

「んじや・・・スタート・・・」

（行くぞ！空馬！）

（OKマスター！）

「先手必勝！ストリームバスター！ラングド・・・ショート！」

10個ほどの小さい魔力の弾が飛んできた・・・

「紅風車～疾風！」

「その技はよめてたよー」

疾風で弾を打ち落としたが有紗は読んでいたかのよつて回避して魔力を溜め始めた・・・

「あれか！やらせん！蒼馬飛燕！」

「！…！どこにいったの？」

「ここだ・・・・・」

「えー？」

高速移動で背後に回つてからの攻撃・・決まるか？

「ストリームバスター！デュフュンドバリアー！」

「OKマスター！」

有紗の背後のバリアが展開された

蒼馬の攻撃は簡単にはじかれてしまった・・

「今度はこっちの番！エクシードバスター！」

（マスター）「うちで対処します！まかせてくださいー・）

（ああ・・・頼むぞ！）

（はい！現れよ！「輝きを持つ変化結晶体」^{クリスタルランサ}）

空馬が言つと結晶体のような物が現れ形が変化していつて盾のような形になつたのだ！

「えー？なにそれ！見たこと無いよー・」

有紗のエクシードバスターは結晶の盾により弾かれた・・

「いくぞ！紅双翼襲撃！」

「くー！そう簡単に喰らわないよー・」

狼双疾風で速攻攻撃！相手が反撃してたら紅蒼閃刀での抜刀斬
撃！

「甘いよー！ストリームバスター！モード・・グレイナル！ブレイン
ダッシュ！・」

モード変化をせると高速で後方へ消えていった
そして魔力を溜め始めた・・・

（マスター砲撃をしてきます距離を詰めるか回避をー・）
(わかつてる！)

（身体ユニゾン・・・いくぞ！）

（OKマスター！）

「え！？蒼馬君の体が光ってる！！」

「ユニゾン！完了！」

「蒼馬君武器が・・・変わってる・・・

「ああ・・・ユニゾンすると魔力値は上がって武器が変化するんだ」

長刀 蒼天夜叉紅桜

紅蒼閃刀の進化刀・・・少し長くなり 紅色と蒼色の混ざった才

ーラを出している

抜刀のスピードも上がり技に切れが増す

短刀 狼牙双連刀

狼双疾風の進化刀・・・所有者のスピードを上げ視力も上がる
一部の魔法も使用可能になる

「ここからが・・・本番だ！」

「うん！いくよ！」

「ストリームバスター！モード・シューティング！！」

有紗の杖があの時の砲撃状態になつた・・・

一撃で終わらせてくるか・・・

・・なら・・こちらもだ！

「シュー・ティングスター・・・」

「蒼龍・・・」

お互いの必殺技・・・

「バスター！！！」

「天王斬！！！」

第五話 陸空試験戦闘（後書き）

作者「盛り上がってきたかな？」

蒼馬「盛り上がりってきたんじゃねえ？」

作者「盛り上がってるのを願うよ・・・」

蒼馬「次回も戦闘だな」

作者「試験頑張ってくれ^ ^ b」

蒼馬「・・・まあな」

作者「感想くれた方々ありがとうございます」

作者「また、ご感想ありがとうござります」

作者「誤字だからけ駄文ですが」

作者「次回もよろしくお願ひします」

第六話 音速の戦士（前書き）

空間管理局入隊となつた蒼馬・・・しかし！
試験戦闘をやらなばいけない・・・
最初の戦いは空・・相手は有紗！
ユニゾンして互いの必殺技を放つ・・・
どうなつたのか・・

第六話 音速の戦士

「シュー・ティングースター···」

「蒼龍···」

お互いの···必殺技!

「ブレイカー···」

「天王斬···」

ドゴオ——ン!!

もの凄い衝撃波と凄まじい音がでた···

(マスター大丈夫ですか!?)
(ああ)なんとかな···)

「さすが蒼馬君···あの技を止めるなんて···」
「有紗こそ···まさか耐えるとはな···以外だ」
「舐めちゃダメだよ···ここからだよ!」

そう言つと有紗の下に魔方陣が出てきた

「汝の動き止めるは魔力 動くは魔法!」
「意味不明な言葉だな···」
「バイスレイド!」

有紗は呪文を唱え終わつたと思つたら···
体が縛られていた···

「な！なに！？これは・・・くそ！体が！」
「ふふふ～」これで終わりだよー。」

(マスター有紗さんの方から凄い魔力が！)
(これを解かないと！)

「まさか蒼馬君に使うなんて・・・さすがだね」
「え？・・・」

「これが・・・私の最大にして最強の必殺技だよー。」

「りや～死亡フラグかな？いや・・・諦めるには早い・・・

(マスター一つ方法が・・・あります)

(方法・・・あれか・・・)

(今)マスターの魔力では5分が限界ですけども・・・

(行くぞ！ー)

「！？蒼馬君の体が！？輝いてる・・・」

「行くぞ・・・フルユニアゾン！ー」

フルユニアゾン

自分の限界魔力値を一定の時間、だけ超えて最大の能力を引き出す
しかし終了後は魔力が空っぽになってしまつ・・・

「フルユニアゾン！空馬！N蒼天夜叉紅桜！」
「す、す”い・・・武器が・・なにあれ？かつこいいかも・・・」

有紗は見惚れていた・・・蒼馬の武器の輝き・・・
見た目・・・に

「これが・・今の俺の力で出来る紅蒼閃刀の最終形態だ・・

「これが・・蒼馬君の本気か・・・私も負けない！・・」

「・・・紅蒼に輝く夜天の刃」！！

「^{ゼノン}紅蒼に輝く夜天の刃」

紅蒼閃刀の現段階最終形態 刃にとても濃い魔力のオーラをまとつている

所有者の魔力 身体能力を上げ 抜刀最速刃の名もあるw

「行くぞ・・有紗・・加減はしない・・

「こっちだつて・・負けないよ！」

有紗の杖の先にすごい魔力・・シユーテイングスター・ブレイカー
よりも
凄い魔力だな・・・

「マスター・チャージ完了です」

「うん！行くよ私の必殺奥義！」

「俺だつて・・負けない・・」

お互いの必殺技・・・これで決まる・・・

「グランド・オブ・ザ・・・・・

「かつこいい名前だな・・・・・

「バスター！・・・・・」

すげえ・・・さつきの技以上だな・・・こりや・・やばい
範囲も威力も凄いだろうな・・・

(魔方陣展開3・・2・・1・・転移!)

ピーーーン!

とてつもない衝撃波と光と音・・さつきとは比べ物にならん・・これが有紗の最大奥義か・・・すごいな・・

「か・・勝ったかな?・・やり・・すぎたかも・」

「まだだ・・・」

「え! ? なんで後ろに・・・転移! ?」

「大正解だ・・・」

転移で有紗の後ろに回りこみ・・・

「これが最大奥義だ・・紅桜蒼天流・・・奥義」
「紅蒼天零閃! ! !」

刹那の抜刀剣撃・・・

「す・・すゞいや・・・」

浮かぶ島を真つ二つにして・・有紗にも大ダメージの様子
有紗は落ちていった・・・

「試合終了! 勝者! 蒼馬君! 」

いづして一戦目の空の戦いは終了した・・・

「次は音速の戦士フェルガちゃんね・・・」

第六話 音速の戦士（後書き）

作者「一戦目お疲れ様～っす」

蒼馬「最初っから出し切った感じだな・・・」

作者「・・・ですねw」

蒼馬「技名と武器ながはまに評価もらつてゐるな・・・」

作者「その二つはーね・・・」

作者「そんなんといひやれ・・・><」

作者「それでは・・・」

作者「感想ありがとうですm・・mまたよろしくですm・・m」
作者「次回も見てやつてくださいですm・・m」

第七話 疾風怒濤（前書き）

空の試験を無事合格し部屋に戻る蒼馬
次の試験は陸・相手は噂のフェルガ
無事陸の試験を終わらせることが出来るのか？

第七話 疾風怒濤

空の試験を終え部屋に戻る蒼馬

明日の準備をしながら「コーヒーを飲んでいた・・・

(疲れた・・・あそこまで疲れるとは・・・)

(フルゴーランしましたもんね・・・お疲れ様です)

すると・・・

「ノンノン・・・

「はいー~ビッグ」

「お、お邪魔します」

「・・・」

蒼馬も見たことの無い人・・・
管理局の人なんだろうか・・・

(フルガさんですね・・・)

(あれが噂のフルガさんか・・・)

「ビービーフモ・・・陸の試験担当のフルガです・・・よろしく・・・
「ひがひがひや よろしくお願いします」

(なんか相手が緊張氣味だな・・・)

(そのようですね・・・)

「何か飲みますか?」

「いえ・・挨拶だけですので失礼します・・明日はよろしく
あ、はいお願ひします」

そう言つてフェルガは去つて行つた
そして蒼馬は明日の準備を終えて眠つたのだった・・・

(マスターへマスターへ起きてください)

空馬の声で目覚める蒼馬・・・

「もうちょい寝たいが・・しうがない・・・

時間は7時・・試験開始は8時だ・・
蒼馬は準備を終え試験会場に向かうのだった

「い・・これは・・・街?」

「そりよ・・舞台は街これが陸の試験会場よ

たくさんビル・・本当に街のようだ・・・
人がいれば絶対街に見える・・・

「ではお一人準備してください・・・

(マスター フェルガさんは数多くの武器を使用します・・頑張つて
ください)
(ああ・・頑張るぞ)

「準備はいいですか・・・スタート!・・・

じつして陸の試験は開始された・・

「行くよ・・蒼馬君ー・ソニックブースト！」

消えた・・一瞬で視界から消え・・そして

「ノーノだよ！」

「後ろかー読んでいましたよー蒼馬飛燕！」

さらに後ろに回り攻撃・・・

「甘いよ蒼馬君・・・モード！ ファルコン・・・

フェルガの武器は双剣から双鎌に・・・

「屍殺し・・・はあ！ ！」

数多くの斬撃がとんできた

「紅風車ー 疾風！ ！」

お互いの斬撃は相殺されフェルガさんが動いた

「雷帝放電波！ ！」

「くー 紅鳳凰波！ ！」

お互いから放たれた衝撃波も相殺され
お互い高速の戦いを繰り広げる・・・

(マスターユニークンしましょーうー)

(わかつた・・・行くぞー・ユニークンー・)

(OKマスター)

蒼馬はユニゾンをしフェルガは魔力を溜め始めた

「ユニゾン完了・・・蒼狼天一閃！」

「速い！・・・」つちだつて・・・神速雷撃斬！！」

カキーン！カキーン！

お互いの高速移動しながらの攻撃のし合い
その速さは一般人では追いつけないほど・・・

「さすが音速の戦士・・・強いですね・・・

「有紗に勝ったほどの実力あるね・・・」

攻撃のやり合いは終了しフェルガが魔法を使用し始めた

「貫け天の雷 裁きと怒りの雷撃・・・！」

空・・雲の様子が変化し雷雲になっている

・・こりややばいな・・・

「バイオレンスサンダ――！」

数にして1~5くらいの雷・・速い！・

ドゴゴー――！

「これなら回避できないはずだよ・・・」

直撃・・蒼馬は回避する術もなく・・・直撃した・・

・・・しかし！－

「まだまだです・・・よ」

「うーうそ・・直撃のはず」

蒼馬は直撃どころか・・フェルガの背後にいた・・・

「これ・・終わりだ！蒼龍天王斬！－！」

「くう！耐え切れない！」

ズバン！－

蒼馬の蒼龍天王斬は直撃しフェルガは吹っ飛んだ・・

「な、なんでバイオレンスサンダーを！？」

「よく見てみてください・・」

「・・・あれは！？」

蒼馬はバイオレンスサンダーの直撃前に
空馬の「輝きを持つ_{クリスタルランサー}変化結晶体」によつて
自分の姿の偽者を作りだし逃げ出していた・・・

「空馬の話だとバイオレンスサンダーは魔力を感知して当てる技で
すよね」

「大正解・・・すごいね蒼馬君・・・」

「これで終わりです・・！－！」

蒼馬がフェルガに突つ込む・・しかし！

「それはこっちのセリフだよ・・・」

「なに！？」

フェルガは背後にいた・・・速くて蒼馬には見えなかつた・・・

「屍殺し！」

「間に合え！紅風車～疾風！」

さつきみたいに相殺を狙つたが全てを
相殺できず一発直撃した・・・

「くう！これくらいなら！」

「まだだよ・・・隼切り・・・」

「紅桜繚乱！～」

お互いの高速剣撃・・・

「さすが蒼馬君・・・切り返しも上手だね・・・

「ありがとうございます・・・」

「でも・・・これで最後だよ！」

フェルガが言うと雷がフェルガに落ちて
フェルガの武器に雷が纏う・・・

「雷天爆碎・・・フレアサンダー！～！」

上空から槍のような雷とフェルガの雷を纏う斬撃
両方回避は・・・無理そうだな

(行くぞ！フルユニゾンで狼牙双連刀だ！)
(OKマスター！～！)

(フルユニゾン！エナ狼牙双連刀！)

ドゴー——ン！

もの凄い音とともに蒼馬にいた場所の地面は吹き飛び
地面上には電流が流れていた・・・

「蒼馬君の反応が・・・無い！？」

「後ろですよ・・・フェルガさん」

「！？！？その武器は？」

「^{ウルフ}狼牙に煌く光速刀」

「^{ウルフ}狼牙に煌く光速刀」

現時点での狼双疾風の最終形態 光速の速さを手に入れるが
攻撃の威力防御面では良くない 敵を惑わす技も使用可能

「これで最後だ！！」

「くう！間に合わない」

「紅疾風怒涛！！」

蒼馬の光速移動しながらの連剣撃・・勝負有りだ・・

「スゴイや・・蒼馬君・・私の・・負けだよ・・」

「フェルガさん・・お疲れ様です」

「勝者！蒼馬君！陸の試験終了」

こうして第一の試練陸の試練は終了した・・・
次は・・・最後の試練だ・・・

第七話 疾風怒濤（後書き）

作者「お疲れ様です^ ^ 蒼馬君」

蒼馬「疲れた・・・寝る」

作者「次で試験最後だね！頑張つてくれ」

蒼馬 お前のほうが頑張れ・・・」

作者一・・・・はいTOTO

蒼馬 - 書き方ナド以外はししひ評価したたしてるな」

作者・そこだけ

蒼馬・元張れよ・・先は長いぞ・・」

作者元張りゆうしりそれでは

作者　こ感想おこなうこころのこころ

作者 - 感想よろしくお願ひします

作者一次回もよろしくです」

外伝 紹介しましょ～の巻（前書き）

今日は今まで登場した武器・技を紹介したいと思います
よろしくお願いします m - m

外伝 紹介しましょーの巻

「今日は俺の技を紹介する予定だ」

「蒼馬君凄い技使うもんね～私達も頑張ろうねフェルガちゃん
～うん！頑張ろうね」

「基本は抜刀だ・・・」

紅桜蒼天流／+

紅風車／疾風

抜刀して斬撃を飛ばす技 蒼馬はけつこう氣に入っている
フルユニゾンすると 一気に3つの斬撃を飛ばすことが可能

蒼狼天一閃

高速の抜刀術での居合い一閃 斬撃のとばせて
間合いを一瞬で詰めることが出来る

蒼天破一閃

一瞬で懐に行き抜刀 抜刀のスピードが命
フルユニゾンすれば残像が出来るほど

紅時空両断

刹那の抜刀術 空間をも斬る速さの技

蒼龍天王斬

刀に魔力を乗せて龍の形の斬撃を飛ばす技
かなりの威力を持っている・・・

蒼馬飛燕

高速移動後背後から敵を斬る技
ユニークン後は残像の出来る速さ

紅双翼襲撃

短刀での速攻攻撃後 後ろに下がつて斬撃を飛ばす技

紅蒼天零閃

紅桜蒼天流抜刀奥義 刹那の抜刀で見えない斬撃をとばし
破壊する技 鋼の塊も真つ一つになる・・・

紅鳳凰波

衝撃波を飛ばす技 主に敵の技との相殺が狙い

紅桜繚乱

高速の連撃 相手の体全体を斬りつける技

紅疾風怒濤

フルユニークン後で光速の連撃奥義

光速移動しながらでも可能

「今のところ技はこんくらいだな・・・」

「蒼馬君ってチートだよね~ユニークンとかさ~」

「空馬に言え・・あいつがチートだ」

「次は武器（ユニークン以降）の紹介だ」

紅蒼閃刀 + 狼双疾風 + 空馬（武器にユニークン） = 紅桜蒼穹刃

紅桜蒼穹刃

蒼馬の現魔力で出来る武器ユニゾン武器
紅色の魔力を纏つており 見た目が美しく技の切れが増す

紅蒼閃刀ユニゾン後=蒼天夜叉紅桜

蒼天夜叉紅桜

紅蒼閃刀の進化刀・・・少し長くなり 紅色と蒼色の混ざったオーラを出している

拔刀のスピードも上がり技に切れが増す

狼双疾風ユニゾン後=狼牙双連刀

狼牙双連刀

狼双疾風の進化刀・・・所有者のスピードを上げ視力も上がる一部の魔法も使用可能になる

蒼天夜叉紅桜+「輝きを持つ変化結晶体」+フルユニゾン

II 「紅蒼に輝く夜天の刃」

「紅蒼に輝く夜天の刃

紅蒼閃刀の現段階最終形態 刃にとても濃い魔力のオーラをまとっている

所有者の魔力 身体能力を上げ 抜刀最速刃の名もあるw

狼牙双連刀+「輝きを持つ変化結晶体」+フルユニゾン
II 「狼牙に煌く光速刀」

「狼牙に煌く光速刀」

現時点での狼双疾風の最終形態 光速の速さを手に入れるが

攻撃の威力防御面では良くない 敵を惑わす技も使用可能

「まあ現時点ではこんな感じかな・・・」

「蒼馬君も十分強いよ・・・頑張ろうねフェルガちゃん」

「うん・・・有紗・・・」

一人は最初よりテンションが低くなるのであつた・・・

外伝 紹介しましょ～の巻（後書き）

作者「・・・強いね・・・十分」

蒼馬「そつか？チートキャラに比べたら・・・」

作者「まあ・・・やうかもだ子び・・・」

蒼馬「武器名 技名に氣合いれず本文に氣合いれるーー。」

作者「頑張りますーー！」

作者「本編にあってーー元無い技名がありましたら教えてください」

作者「それではーー感想ありがとうですーー」

作者「感想よろしくお願いしますーー」

作者「次回もよろしくですーー」

第八話 空間と無限の闇（前書き）

音速の戦士フェルガとの激戦を終え
残す試験は後一つ・・・相手は駆動花蓮　闇の魔法使いらしい
有紗やフェルガよりも強い噂で実力はあるらしい
戦闘場所は空間地帯　宇宙空間に似ている場所らしい

第八話 空間と無限の闇

陸の試験をクリアして部屋に戻る蒼馬
明日の試験のことを考えていた。

(明日で最後か・・・空間ね～・・・)
(相手は駆動花蓮さん上級魔法を使いこなす魔法使いです)
(相手にとつて不足無しだな・・・)

すると・・・

「ンンン・・・

「蒼馬君へ 遊びに来たよ～」

「有紗とフェルガか・・どうしたんですか?」

有紗とフェルガが遊びに来た・・なんのよつだひつ?

「さつさと言つたでしょ~遊びに来たよ~って
「遊びに来たんですか・・まあ座つてください」
「うん!ありがとう~」

そう言つと有紗は椅子に座らず
蒼馬の背中に密着してきました・・。

「あ、有紗、ど、どうしたんだ!~?
「えへへ~気にしないの~(／＼／)」
「とにかく離れろ・・・」
「え~もう~は~い・・・」

(マスターも、うれしいなら、うれしいと)
(・・・・・もう一度言つてみろ・・・・)
(すいませんでした・・・・)

「明日は花蓮ちゃんが相手だね恩 頑張ってね~」

「ああ・・・まあ負けないよう頑張るわ」

「花蓮は闇魔法を得意としてるからね・・頑張って」

そんなに対戦相手の情報を言つてもいいのだろうか?
と疑問に思いながら1時間ほど話をして有紗達は帰つていった。

「空間か・・・・寝るか

蒼馬は寝ることにした・・すぐに睡魔に襲われ

蒼馬は深い眠りに落ちた・・・

(マスター マスター 朝ですよ~)

「いつもの空馬の田覚ましで田を覚ました・・・

「以外と良く眠れたな・・・さて行くか

蒼馬は準備してから試験会場へと向かつた

「失礼します!」

「失礼するなら帰つてき~」

「失礼しました! つて危ない・・危うく帰るとこだつた」

「ほほ~なかなかやるね~さすが噂の蒼馬君や」

・・・戦闘準備をしている・・この人は駆動花蓮さん・・無限の闇の異名を持つ魔法使い・・・には見えない。

「今失礼なこと思つたやろ・・」

「いえ・・・思つてません・・」

「まあええわ・・んじゃやりましょか~」

「お願いします!」

こつして最後の試験・・空間の試験戦闘が始まった

「場所は空間地帯・・二人とも準備はいい?・・・スタート!・

「先手必勝や!」

「虚空の闇 彼方より来るわ

殺戮の闇 無限の力 ここに集え!・

「インフィニッシャーク
無限の闇」 ! !

花蓮が魔法を唱えると黒い巨大な球体が姿を現した・・・。

「行け! 暗黒の枝! !」

花蓮が言うと球体から枝のような鋭い物が大量にこちらに向かってきた・・・。

「ひつちだつて・・紅鳳凰波！」

「ほほ～それが紅桜蒼天流つちゅうやつか」

鳳凰波で枝を相殺しこりらも反撃

「蒼狼天一閃！…」

「甘いで…虚空の壁！…」

花蓮が言つと黒い壁が現れ俺の攻撃を防いだ・・・。

「行くで…せきりと終わらせたる！…」

「混沌より来たれ 無限の闇

万事を破壊する 絶望の闇と破滅の空間すべてを飲み込め！」

「無限と虚空の闇」
ダーカクネス

・・・凄い大きさの黒い球体が現れた・・・
さきほどよりも大きく・・威圧感が凄い

(空馬！コニゾン！行くぞ！)

(OKマスター！…)

(コニゾン！)

「それがコニゾンつちゅうやつかな？」

「ああ・・・行くぞ！」

「蒼龍天王斬！…」

「蒼い龍が花蓮に向かつて飛んでいく
どうでる・・?

「それくらいで倒せると思つか?・・いへでー

「ダークネススター
混沌闇波動!!

相殺された・・あつけなく・・強い。

「なら・・蒼馬飛燕!-!-

「甘いで空間転移!」

後ろに高速移動して斬つたと思ったが
花蓮は俺の後ろにいた・・

「これで・・しまいや!-」

「な!-?・・・」

(空馬! 「輝きを持つ変化結晶体」
クリスタルランサー
(準備OKです!) いけるか!-?
(準備OKです!)

「しまいや・・・虚空の闇の破壊!」
セロ
ダーク デストロイ

「ド」「――ン!-!

巨大な黒い球体は爆発と同時に大量の槍のような物を
飛ばした・・・

「ふ~これでどうかな?・・・な!-?」

「気を抜くのは速い・・・紅風車~疾風!」

「さすがやな・・・虚空の壁!」

相殺された・・・さすが花蓮さん・・・噂のほじはある。

「行くぞ! 蒼影残像!」

「なー? なんや・・・これ・・・分身の術かいな?」

蒼影残像は高速で動くことにより大量の残像を作り出し
相手を惑わす技

「・・・甘いわ・・・全闇消滅!」

「な・・・に・・・?」

花蓮の周囲から黒い礫が飛んできた・・・
さすがに回避出来ず直撃・・・

「回避失敗か・・・残念やな・・・終わりや!」

「まだだ! フルゴニゾン! !」

「! ! それが・・フルゴニゾンか・・見た目かっこええやん」
「これが身体の能力の極限まで高めるゴニゾンだ」

武器へのフルゴニゾンとは違ひ身体の能力を
極限にまで高めることが出来る

「蒼馬飛燕!」

「! ! はやい・・虚空の壁! ! ! え?」

蒼馬は後ろに回り「! ! 」と斬りつけた間にのを防げたとした花蓮だ
つたが

後ろにいた蒼馬は・・・残像だった

「しまつた！」

「く~りえ！紅白虎逆鱗！！」

「…？間に合わへん！」

「ド、コオーネン！」

刀に紅の魔力を纏わせ全身全靈の力で両断

「・・・次元の使い・・恐ろしいもんや・・・でも・・まだや！」「なに！？」

今まで決着が着いたと思ったが・・

花蓮の持っている本から黒い魔力が・・溢れ出す…！

「これが必殺技つてやつや・・・受けでみ！」

「銀河の闇 虚空の彼方へ

汝を消滅させ 永遠の闇の糧となれ！」

「銀河の永遠闇」！
〔ヨーバース オブ・ザ・ダークネス〕

！！！！

有紗のシュー・ティングスター・ブレイカーよりの凄く
何と言つまがまがしいオーラの波動・・・。

「これでどビめや！！」

「まだだ！紅守天絶光！」

「ペーーーン！－

もの凄い衝撃波と黒い爆風・・

「はあ・・はあ・・これなら・・・・！」

「・・・まだ・・・だ」

「うーうそやろ？不死身か！？」

紅守天絶光

紅桜蒼天流の守備技 強大な一撃から

刀から出されるオーラと斬撃を放ち防御する技

「・・やりあるわ・・・・」

「こちらの番だ・・・行くぞー！」

「蒼龍天王斬！！」

ドゴオーネン

・・・勝負はついた・・・・

「しょ・・勝者 井上蒼馬君！！」

ひつして3つの試験戦闘を終えたのだった・・・・

第八話 空間と無限の闇（後書き）

作者「お疲れ様 . . .」

蒼馬「どうした・・・疲れてるのか?」

作者「深夜の更新が多くて・・・ね」

蒼馬「まあ頑張れ」

作者「うん・・・頑張る!」

作者「それでは!」

作者「ご感想ありがとうございました! - - -」

作者「皆様からのご感想待ってます! - - -」

作者「誤字だらけの駄文ですが・・・」

作者「次回もよろしくです!」

第九話 練習試合（前書き）

試験をすべて終えすべて合格と言つ完璧な結果で合格した蒼馬

空間管理局入隊当日

管理局の剣士と試合することになるのは・・・。

第九話 練習試合

3の試験を終えた翌日

蒼馬はアレックスに呼び出されていた・・・

「まずは合格おめでとつ」

「ありがとうございます・・で入隊するんですか?」

「ええ・・陸空戦士になつてもらいます」

陸空戦士

陸部隊と空部隊両方の部隊の戦闘員

「はあ・・・フェルガと有紗の部隊ですか?」

「ええ そうよ頑張つてね!」

「はい!今度ともよろしくお願ひします」

会議室を出た・・・扉を開けると女人の人があつた・・

「お前が井上蒼馬か?」

「あ・・・はい・・・そうですけど」

「とても強い剣士らしいな・・・」

「いえ・・・言うほど実力もありませんよ」

いきなり話しかけられて剣士?と聞かれて
蒼馬は少し焦っていた・・・。

(なんだ?この人?知つてるか?空馬)

(烈風の剣士エコーズさんです・・かなりの実力者です)

(剣士か・・・まさか)

「私と戦ってくれ！頼む！」

「・・・・・」

(やつぱりか・・・・・)

じつして断ることも出来ず・・・Hコーズと練習戦闘することになったのだ・・・

「ではルールは試験と同じ・・・いいか？」

「はい お願いします」

「では・・・いくぞ！..」

言つとHコーズは剣を鞘から抜いて突進してきた・・・速い！

「速い！紅鳳凰波！..」

「甘い！烈火豪衝！」

お互いの衝撃波が激突・・・お互い凄い威力だ
エコーズが仕掛けてきた

「震裂凍破斬！..」

「くつ！紅時空両断！..」

お互いの剣技の打ち合い・・・
Hコーズのほうが実力は上・・・だが！

(ユニゾンだ！いけるか？)

(OKマスター・・ユニゾン！..)

「ほ～それが噂のユニゾンか……こい！」

「ああ・・・いくぞ・・・蒼馬飛燕！」

エコーズの後ろに来た・・・しかし！

「甘い！怒涛爆碎！」

「なに！？がはあ！」

エコーズの怒涛爆碎・・・なんというカウンター攻撃だ・
蒼馬は回避もできず直撃した・・・

「はあ・・・はあ・・・たすが・・・」

「まだだ！いくぞ！」

「くつ！やられてばかりだと思つなよー！」

「蒼狼天・・・・・

「裂風我・・・・・

「「一閃！――！」

お互の一閃が激闘・・・

剣と剣との戦い・・蒼馬は試験以上に苦戦していた・・・

(フルユニゾン・・・いくぞ！――)

(OKマスター！――フルユニゾン！――)

「それが・・・フルユニゾンと言つやつか・・・なかなかの剣だな・

・
「紅蒼に輝く夜天の刃」――
セノン フォース

お互いが・・・しかけた！

「蒼龍天王斬！」

「斬魔烈火閃！」

ズバアーン！！

お互いの技がぶつかり合い相殺・・・
まだ終わらぬ剣技の打ち合い・・・

「あ・・・あ・・・あ・・・」

「あ・・・あ・・・やるな蒼馬・・・・」

「エコーズこそ・・・だけビ・・次で・・・さめるー・」

「こちらこそだ！！」

エコーズの武器が変化した・・・大剣に近い剣・・・
大きくなつたのだ・・・

「烈火爆碎・・・霸王斬滅剣！！」

もの凄い斬撃は地面をつたつて飛んでくる・・・
速い・・

「じつに来て考えた・・・必殺技だ・・・・」

(マスター危険です！あの技はマスターの魔力のほとんどを...)
(あれ以外に霸王斬滅剣を止める技は無い・・いくぞ！！)

蒼馬は片手で持っている刀を両手で持つて構えた・・・

すると・・刀に魔力が纏つて剣みたいになつたのだ・・・
魔力が凄い速さでたまつて輝いている・・・

「^{エクス}絶対勝利の剣」！！！

「な・・なに！あれは！」

エコーズの放つた霸王斬滅剣をも打ち貫き・・・
伸びるような輝く剣・・・エコーズに向かつていった・・・

ド「――――ン！――！」

「・・あれば・・・^{エクス}絶対勝利の剣か^{カリバ}・・・見事」
「はあ・・・はあ・・俺もダメだ・・・」

こうして戦闘は終了した・・・
蒼馬の勝利の終わつたのだつた・・・

第九話 練習試合（後書き）

作者「蒼馬君強すぎでしょ　ｗｗ」

蒼馬「兄貴より弱いけどな・・・」

作者「エクスカリバーかつこいいねえ　ｗ」

蒼馬「この技をどう出すかＰＣの前で悩んでたもんな・・・」

作者「真のエクスカリバー・・・」

蒼馬「何か言つたか？」

作者「なんにも無いです　それでは」

作者「ご感想ありがとうございました　～～」

作者「皆様からのご感想待つてます」

作者「ぜひ一次回も見てやってください　～～」

第十話 仲間達（前書き）

Hコーズとの戦いにギリギリで勝利した蒼馬
今日はアレックスの呼び出しで
今後任務をともにする仲間達の紹介があるらしいので
会議室に向かっていた…。

第十話 仲間達

Hコーズとの戦闘から2時間・・・アレックスに呼び出された蒼馬は会議室に向かっていた

「失礼します！」

「失礼するなら帰つてき~」

「失礼しました・・つて花蓮・・2度目だぞ・・」

「ほほ~ 2回目も帰らなかつたとは・・蒼馬君さすがやは~」

失礼しますネタが終了し会議室を見渡してみる・・・知らない人が数人立つていた・・・

「蒼馬君あなたの試験結果ででました・・・発表しますね」「あ~はい・・お願いします」

井上蒼馬 試験結果

ランク AAA LV4 魔力値Bクラス 陸空戦士
陸A+ 空A 空間B+・・・の結果だつた・・

「・・・さすが蒼馬やわ~・・・」

「私より・・・す~」いかも・・・・・

「あはは~さすが蒼馬君・・・」

周りは驚きの顔をしている・・・凄い結果らしい

「さきほども言つたように陸空部隊に入隊してもらいます

「はい! お願ひします」

「部隊の仲間を紹介しますね」

陸空部隊・・・メンバー紹介

「さきほども剣を交えたが・・・エコーズだ、よろしく頼む
「あー・エコーズと同じ部隊なのか・・・」

エコーズ ランクAAA LV4 魔力地Bクラス

陸AA+ 空BB 空間B 武器 霸王魔剣

「獄衣司です お願ひします!」

「ああ・・よろしく」

獄衣司 ランク BBB+ LV3 魔力値B+

陸BB 空A 空間B 武器 イノダイマー (回復 補助系)

「フォーマルトです・・・よろしく・・・」

「こちらこそ・・・よろしく」

フォーマルト ランクA 魔力値A

陸BB 空A 空間C 武器 イーグルバスター

「今いるのはこの3名よ今後はエコーズさんと任務が多いでしょう

「そういうことだ蒼馬・・・よろしく頼む」

「エコーズ見たいな強い人とで、よかつた・・・」

蒼馬はエコーズとで安心していた・・・

「陸空戦士は陸部隊 空部隊の補佐だから有紗達も多いわよ

「よろしくね~蒼馬君」

「ああ・・よろしく」

こうして部隊編成も発表され蒼馬にも自由な時間が出来た・・・
しかし!

「蒼馬君いるか~?」

「蒼馬いる~?」

有紗と花蓮が部屋にきた・・・。

「いるけど・・・何のようだ?」

「今から武器持つて練習戦闘部屋にきてね~」

「え?・・・・・・」

一瞬思考回路が停止した・・・

「蒼馬君待ってるよ」

(マスター 生きてますか?)

(俺・死ぬのかな?)

(まあ行ってみましょ・・・・)

ひつして蒼馬練習部屋へと向かったのだった・・・

練習部屋には 有紗 フエルガ 花蓮 エコーズ アレックス
フォーマルトがいた

「さきほど見せたあの技・・・もう一度いいか?」

「最後にやったやつか?」

「ああ・・・頼む!」

「・・・死ぬかも・・・」

皆が期待の眼差しでこちらを見つめる
やるしか無いか・・・

(空馬・・・一回だけやるぞ・・・)

(一回しか撃てませんよ・・・)

(だな・・フルユニゾン! - !)

(OKマスター・・・フルユニゾン! - !)

「紅蒼^{ゼノン}に輝く夜天^{フォース}の刃」 ! !

「・・・やるか・・・」

「蒼馬君頑張つて〜」

蒼馬が刀を上に上げて魔力を溜め始めた・・・

「いぐぞ! - !」

皆が一斉に唾を飲む・・・。

「絶対勝利^{エクス}の剣^{カリバ}」 ! ! !

ズバアアー——ン!

光輝く剣は伸びていき・・目の前の城壁っぽいのを真つ二つに破
壊した・・。

「・・・すごい・・・私達3人の必殺技でやつと破壊できる城壁を
「一人で破壊しあうた・・・仰天やわ・・・」
「・・・さきほどより・・・強くないか?」

さきほど「絶対勝利の剣」より魔力をたくさん纏わせ放った
蒼馬のほとんどの魔力を消費したのだ・・・。

卷之三

神技?なんですか。。。。それ?

一の曲でもつゝも強い枝の種類

卷之三

蒼馬の思考回路停止その2

ええええええええええ！！！！

すこしは……さすがね……ただ着いやなけれ……」

祖
技

この世に多数あり……とてこもなし威力を誇ると言われる
使える者は少ない・・・

「ありがとうございます・・・疲れただよ? もうここわよ」

こゝして蒼馬は部屋に戻った。・・・

卷之三

ヒーラー・アーティスト

まだまだ伸びるな・・・・・脅威だな・・・・・

第十話 仲間達（後書き）

作者「エクスカリバー」

蒼馬「お気に入りみたいだな・・・」

作者「YESSゲームとかでもかつていいしね」

蒼馬「次回から任務つてやつか？」

作者「そつだね有紗との任務だね頑張つて」

蒼馬「ああ・・・」

作者「真のエクスカリバー完成も・・・」

蒼馬「ん？なんだ？」

作者「いや・・・まあ頑張つてね」

蒼馬「ああ・・・お前のほうが頑張れよ・・・」

作者「はい・・・それでは」

作者「ご感想ありがとうございましたm - - m」

作者「皆様からの評価・感想待つてますm - - m」

作者「次回も見てやってくださいm - - m」

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリフォン（前書き）

神技を習得していた蒼馬
今日は有紗との初任務・・・。
うまくいくのだろうか？

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリオン

「蒼馬と有紗・・・今から任務に行つてもいい」
「分かりました・・・場所は？」

「黒金雪山だ・・・」

「分かりました！準備の出来次第出発します！」

こんな感じで俺と有紗の初任務はスタートしたのだった・・・。

「蒼馬君と任務 楽しみだ」「
まあ頑張るか・・・」

今回は討伐任務 討伐対象はペルガトリオン
雪牙竜と呼ばれている・・・らしい

「二人とも転移します。いいですか？」
「はい！」

じつして初任務スタートしたのだった・・・。

「うう～けつこう寒いな・・・」
「冷えるね～さて早く終わらせて
ああ・・・」

俺と有紗は山洞窟の奥のほうへと進んでいた・・・

「今にも出てきやうだな・・・」

「ストリームバスター探索スタート！」

「OKマスター」

：

：

「マスター発見しました この100m奥です」

「了解！行こう蒼馬君！」

「ああ・・・」

俺達は奥へと走った・・・寝てやがる・・・。

「おやすみ中だね～」

「寝ている間に倒すか・・・」

「そうだね！行くよ！」

その時だった・・・

「ガアアアアアアアー！！！」

「起きたか！？」

「エクシードバスター！」

有紗の放つたエクシードバスターを回避し反撃してきた

「ガアアアアアアー！！！」

「雪のブレス！？ティフェンドバリア！」

ペルガトリオンの放つたブレスは弾かれたが

周囲が凍てついている・・・

「紅風車～疾風！」

「レーベンハーフェル」

二人の攻撃も簡単に回避される

ヘ川ガトリオソカロは魔力を溜め始めた……

「危険だよ蒼馬君！逃げよう！」

レノン・ジョンソン著『政治の本質』

大清書

ペルガトリオンの口からブレス・・・先ほどよりも
とっても魔力値が濃く当たって無くとも寒い

「蒼龍天王斬！」

アーティスト

なんとか相殺されたがペルガトリオンが突進してきた

「くう！？紅鳳凰波！」

「エクシードバスター！」

二人の技により吹き飛ばされるペルガトリオン
しかし まだ余裕のかのように突進してくる・

「蒼狼天一閃！」

難なく回避された・・・速いな・・・

「タイプ！グレイナル！アクセルストーム！」

有紗の高速突進さすがに反応出来ず直撃・・・しかし！

「ガアアア！」

ペルガトリオンの尻尾のなぎ払いが
有紗に直撃

「きやあ！」

「くそ！紅風車～天魔！！」

紅風車～天魔

抜刀の斬撃がどんどん増えていく最大10個の斬撃になる
さすがに対処しきれないペルガトリオンに直撃
怒つてしまつたようだ・・・

「有紗！いけるか？」

「うん！行くよ！シュー・ティングスター・・・」

「蒼龍天・・・」

「ガアアアアアアアアアアアア！」

怒りに我を忘れ突進してくるペルガトリオン

「ブレイカー！！！」

「王斬！！！」

二人の技は直撃しペルガトリオンは灰となつて消えた・・・

「任務完了だね お疲れ様」

「ああ・・・お疲れ様」

(マスター上から反応です！)
(なに！？)

「鋼落とし！－！」

「有紗避ける！」

俺と有紗はギリギリ回避に成功し
無事だった・・・

「な、なに、貴方は誰なの？」

「貴方達を殺す者です・・・鉄の雨！」

「くそ！紅風車～疾風！」

相手の技と相殺したが・・相手はさうに攻撃していく

「銅の剣撃！」

「エクシードバスター！」

ドゴー――ン！

再び相殺・・・

「井上蒼馬・・あなたを排除します」

「俺か！？恨みを買った覚えは無いのだが・・・
死んでもらいます！」

(フルユニゾンだ！いくぞ！)

(OKマスター・・・フルユニゾン！)

「紅蒼に輝く夜天の刃」

「それが・・・行きます！鉄の雨！」

「紅鳳凰波！」

再び相殺・・・相手の剣に魔力が纏い始める

「時間が無いのです・・・死んでもらいいます！」

「そう簡単に死ぬものか！」

「悪夢の十字架！！」

「蒼龍天王斬！！」

お互いの強力な技がぶつかり合い相殺

「まだだ！」

相手が突進しようととしたとき・・・。

「エクシードバスター！」

「なに！？だが・・・甘い地獄の鎖！」

「きやあ！？」

有紗は赤い色の鎖に拘束されてしまった・・・

「それは私の魔力が尽きるか私が死ないと解除されません」

「貴様・・・蒼烈火獣天！」

連乱撃を放つが回避され・・・相手の反撃

「これで終わりです！悪夢の十字架！」

相手の必殺技・・回避に成功し・・・気づいた

(マスターあの技の後相手に隙ができます!)
(わかつた! 行くぞ!)

蒼馬は刀に魔力を溜めながら相手に向かつて突進した

「甘いですね! 突進するとは命を捨てにきましたか!」
「・・・試してみるか?」

「ふん! いいでしょう! 悪夢の十字架! 」

蒼馬は紙一重で回避し魔力を最大まで溜め
相手に急接近した・・・

「何! ? 回避されただと! ?」
「これで・・終わりだ・・・・・」

最大まで魔力を溜めた刀を振りおろす!

「絶対勝利の剣」!
エクス カリバー

「これは! ? ガハア! ! !」

光輝く伸びる剣が相手の腕を切り落とした・・・

「くーくそ! 撤退だ! 鉄の雨! 」
「な! ? 紅鳳凰波! 」

ドゴーーン!

相手は相殺された時の煙が出ると同時に逃げて行った
有紗の拘束も解除された・・・

「大丈夫か？有紗？」

「う、うん、ありがとひつ・・・本部に戻つて連絡しなきゃ」

「ああ・・・戻るか・・・」

いひして俺と有紗の初任務は幕を閉じた・・・。

第十一話 初任務 雪牙竜 ペルガトリフォン（後書き）

作者「任務には危険が付き物さ！」

蒼馬「・・・・・」

作者「お疲れ様です＝＝＝」

蒼馬「序盤・・・急展開すぎないか？」

作者「・・・＝＝」

蒼馬「エクスカリバー！！」

作者「ギヤアアアアアアアー！-！-！」

蒼馬「まあ馬鹿をほつといて・・・」

蒼馬「（）感想ありがとう）やれこます」

蒼馬「皆様からの評価と（）感想待つてます」

作者「次回も見てやつてください！＝＝＝」

蒼馬「生きてたのか・・・・」

第十一話 エクスカリバー（前書き）

初任務を無事終了し任務成功した蒼馬と有紗アレックスから休暇をもらい休む日になるはずだったのだが・・・

第十一話 エクスカリバー

「君達、今日は休暇だ休んでいいよ
」「やつた！」

俺や有紗、フェルガ、花蓮は大喜び

「蒼馬君、遊びに行こうよ」「
ん、悪いけど無理だ」「
え、なんで？」「
ん、ちょっとな」

数日前、「絶対勝利の剣」を見せたときに
アレックスに言われた・・・

「その技は昔ある人物が使っていた技なんだ・・・
「そ、そなんですか・・・」
「その人はその技に魔力を乗せすぎ死んだ・・・
「・・・・・そなんですか」
「君も改良しないと・・・死ぬぞ」

こうして俺は新たなエクスカリバー習得のため
訓練所で修行することにした・・・

「なら私達も付き合つよ～」「
え？いいよ、せっかくの休暇だし・・・」「
そないなこと言わずにねえやん付き合つたって
まあいいけど・・・」

「うつして俺達は真正クスカリバーの習得の向けて練習することとした・・・。

「どんな感じにするの？」

「ん~イメージでは剣の形を保ったのをやりたいな~と」

今の俺の「絶対勝利の剣」^{エクスカリバー}は

魔力を溜めて輝く剣を前に伸ばし両断する技

「蒼馬がイメージしてるのは少し伸ばして剣の形を保つことやろ~」「そうこうことだ」

ソフして真正クスカリバー習得に向けて練習が始まった

「フルユニゾン!!」

花蓮が何かを唱え始めた・・・

「パイダステイン!!」

その瞬間俺の体は黄色い光に包まれた

「これが包んでる間は魔力が凄い速さで回復していくよ

「ありがとうな花蓮助かるよ」

「お礼言われるほどのことじゅ~・・・・(//)(//)」「んじゅやるか・・・・・

意識を剣の形の集中・・・・・

「エクス
絶対勝利の剣！！！」

剣が伸びた・・・成功か？

「凄い！成功したよ！」

「いや・・・まだだ・・・」

俺は剣を振つてみる・・・剣が伸びてしまった

「くそ！・・・」

剣が伸びずそのままの形で保たなければいけない・・・
魔力コントロールと集中力が必要だな・・・

(マスター2分休憩すれば行けます)
(OK・・・んじゃ休憩だ・・・)

「よし休憩だ・・・」

「え？速くない？」

「けつこう魔力を消費するからな・・・」

2分後また再開・・・。

「集中集中・・・いくぞ！」

「エクス
絶対勝利の剣！！！」

また剣の形で保つことは出来た・・・問題は
振つて形を維持できるかだ・・・問題は

「頑張れ～蒼馬～」「
ああ・・・行くぞ！」

振つてみた・・・しかし剣が伸びていつてしまつた

「くそー！」

これが3時間ほど続けられた・・・

「蒼馬君・・・ちょっとといい？」

「ん？ なんだ有紗？」

「ん～なんて言えばいいのかな？ 蒼馬君は魔力を放出しそぎだから剣が伸びちゃうんだよ」

「そうなのか？ ・・・ どうすれば・・・」

「魔力を放出しそぎず・・・ 固定つて感じかな・・・」

「固定か・・・」

確かに・・・魔力を出しすぎてもいけない気がする

「蒼馬私からもいい？」

「ん？ フエルガか・・・ なんだ？」

「剣だけに魔力を纏わせてたらダメな気がするんだ・・・」

「剣だけじゃなく・・・ 全身つてことか？」

「うん・・・」

剣だけじゃなく全身に魔力を纏わせるか・・・

「蒼馬私からも～ええか？」

「花蓮からもか・・ああ頼む」

「コントロールや・・蒼馬は振るとき魔力のコントロールが出来てないんや」

「コントロールか・・ああ・・ありがと」

魔力のコントロールか・・・

3人から言われたことを試してもう一度・・・

「頑張れ～蒼馬～」

「ああ・・・行ぐぞ！」

全身の魔力を・・そして魔力を固定・・・魔力コントロール！

「真・絶対勝利の魔劍！！！」
〔エクスカリバー〕

ここまでではいつも通りだ・・・後は・・・

俺は振つてみた・・・すると！

剣は伸びず斬撃のような剣が伸びただけだった・・・

「これは！？前のエクスカリバーを振ったときと同じ・・・」

「凄いや～蒼馬振つたら前の技がでるなんて・・・」

「しかも剣の形を保つてから何発も撃てる・・・」

「まあ俺の魔力じゃ～この技は5回が限界だ・・普通に振るならいけるけど・・」

俺は3人に近づいた・・・そして

「3人もーありがとうーアドバイスが無かつたら無理だったよ

「 「 「え！？」」

俺は3人に抱きついていた・・・

「そ、蒼馬君！・・・大胆だよ・・・（／＼／＼）」

「お！おめでとう蒼馬・・・（／＼／＼）」

「そ、蒼馬～大胆やわ・・・そういうところも・・ええ～な・・・（／＼／＼）」

こうして「真・絶対勝利の魔劍」^{エクスカリバー}は完成し
その後各自の部屋で休んだ・・・

「ありがとう・・・3人とも・・・・・」

第十一話 エクスカリバー（後書き）

作者「お～フラグっぽいのが・・・」

蒼馬「真技完成・・・試してやろうか？」

作者「すいませんでした！」

蒼馬「これで戦闘も少しほは楽になるかな」

作者「蒼馬君の取り合ひは楽にならじやないね・・・」

蒼馬「ん？なんだって？」

作者「なんでもない！それでは」

作者「ご感想ありがとうございます」

作者「皆様からの評価&ご感想待つてます」

作者「次回も見てやつてください」と

第十二話 神召還者（前書き）

新しい技を完成させて休暇を楽しむ蒼馬
しかし 魔物の反応があると言われ
そこに向かう蒼馬とエコードだった・・・。

第十二話 神召還者

「ここの辺りだつたな・・・」

「そうですね・・・上か!?」

「ほおゝバレたか・・・」

「開始早々戦闘ですか・・・」

敵は鎧見たいな感じのを纏つている

武者だ・・・。

「我が名は武鎧ヨガミ・・・ベル様の召還獣

「ベルの!?!?」

「ああ・・・死んでもうつ!-」

「行くぞ!蒼馬!!」

相手はこちらの様子を探つてるかの様な動き
2:1有利のはずだ・・・

「烈火豪衝!-!-」

「武我剣聖・・・」

「ドゴーーーン!-

お互いの技は相殺されたがヨガミの技のほうが
上に感じた・・・。

「紅風車!疾風!」

「裂風我一閃!-!-」

「破邪断刃!-!-」

「」

ヨガミの技と俺達一人の技は相殺・・・2・1なのに・・・

「蒼馬！来るぞ！」

「焰鵬鶴舞踊！」

「くう！蒼龍天王斬！！」

激しい技の打ち合い・・・お互い魔力を少しづつ消費していくがヨガミに疲れの表情は見えない・・・

「もう飽きた・・・死ね！」

「貴様がな！斬魔烈火閃！」

「紅鳳凰波！」

ドゴオ――――ン！

二人の技はヨガミに当たったかと思ったが・・・。

「甘いな・・・断空蘭斬破・・・」

「な！？後ろだと・・・くそ！」

「な！？エコーズ！」

ヨガミは後ろに回り込みエコーズを攻撃

エコーズは直撃を食らつたが気絶はしていない

「まだだ！烈火爆碎・・・霸王斬滅剣！！」

「な！？ガアア！？」

エコーズの霸王斬滅剣が直撃したが・・・

「く・・・貴様ら如きが・・・我に一撃を・・・」

「蒼馬・・・少し休む・・・頼むぞ」

「ああ・・・任せろ」

Hコーズは下にゅうくりと落ちていき1・1
しかしヨガミは技を直撃でくらつた・・・
いける!・

「行くぞ!フルヨニゾン!」

「く・・・本気か・・・」

「ああ・・・試させてもらひや」

実戦では初めてだが・・・やるか
魔力を全身に・・・固定・・・コントロール!

「真・絶対勝利の魔剣!!
エクス カリバー」

「なに!? 神技か!?!?」

「おおおおお!?!?」

ヨガミの向かつて突進して斬りつける

ヨガミは回避するが斬撃から剣が伸び直撃

「な・・・に!?!バカな!」

「これで・・・終わりだ!」

両手で持った「真・絶対勝利の魔剣」
エクス カリバーで両断
ヨガミの体力で回避出来ず真つ二つになつた・・・

「ふう〜やつたか・・・」

「合格だよ・・・蒼馬君・・・」

「この声は・・・ベルか!?!?」

「大正解!」

俺の後ろにベルが立っていた・・・

「また戦いにきたのか？・・・」

「違うよ～合格発表しにきたんだよ」

「ふざけるなら斬るぞ・・・」

「エ、エコード説明してあげて・・・」

エコードの名前を知っている？
仲間なのか？

「蒼馬・・・ベルは空間管理局の仲間だ・・・」

「え！？でもあの時襲つてきたじゃないか」

「蒼馬君の次元の使いとしての実力を試したんだよ・・・」

俺の実力を試す？なんでだ・・・

「前回の次元の使いはベルと共に行動していたが・・・」

「実力の無さあまり戦死したんだよ・・・」

「・・・」

戦死しない程度の実力が無いか調べたのか・・・

「でも蒼馬君強いね・・・これなら奴らに勝てそうだね」

「ああ・・・さすがだな」

「奴ら？・・・誰だそれ？」

「時が来れば・・・分かるよ・・・」

こうしてベルが仲間だつて分かつて複雑な気持ちになりながら
本局へ戻る3人だつた・・・

第十二話 神召還者（後書き）

作者「お疲れ様～蒼馬君」

蒼馬「まさか・・・ベルが仲間だったなんて・・・」

ベル「僕まあまあ強いから大丈夫だよ～大抵は一人行動だし」

作者「ゲストのベル君で～す」

ベル「こんチワワ～ベルです～」

蒼馬「奴らって誰だ・・・？」

ベル「蒼馬君強いよね～神技使えるし・・・」

蒼馬「お前も使えるんだろう・・・どうせ

ベル「まあ～ね・・・」

作者「今日はここまで・・・それではー」

作者「ご感想ありがとうございましたm・・m

作者「皆様からの評価・感想アドバイスなど待つてますm・・m

作者「次回も見てやつてくださいm・・m

第十四話 空間破壊者（前書き）

ベルが仲間だと言つ事が判明し本局へ戻る
蒼馬とエコーズ ベルは単独行動が好きだと言いどこかへ消えた
本局へ戻つた二人は任務完了
平和な一時を破壊する者が・・・

第十四話 空間破壊者

「お疲れ様一人とも休んでいいよ
「蒼馬！私と戦つて」

「断る！」

いきなりの戦闘申し込みを断つて俺は
自分の部屋に戻った

「あ～疲れた・・・あれ？花蓮か？」

「お～蒼馬はん～おかえり」

「あ、ああ～ただいま・・・ってなんで居るんだ？」

「ええや～ん別に居たって・・・」

何故か俺の部屋に花蓮がいた・・・なんでだ？

「まあ本当のこと言つてビルの言つてた奴らの正体を教えにきたん
よ」

「そつなのか・・・で？」

ベルが任務の最後のほうで言つていた・・・奴ら

「奴らってのは空間破壊者のことよ
「空間破壊者っ！」

空間破壊者

本局最大の敵で次元・・・空間を破壊しこの世の秩序を破壊を試

みている

チームのような集団があり けっこつな数があるそつだ

「つむ感じやわ」

「え？ 今の説明だったのか・・・まあいいや」

「まあ私たちの目的は空間破壊者をいなくする」となんよ

「大変そつだな・・・まあ俺もやらなきゃな」

空間破壊者の残滅・・・実力はけつこにあるその集団
だからベルは俺の実力を試していたのか・・・

「ああ～眠いな・・・」

「もう寝るなんか？早いな」

時間はまだ午後7時・・・早すぎるが眠い
時計を確認した後睡魔に襲われ意識が消えていった
枕じゃない柔らかい感じの感触がしたが・・・いいか

「そ、蒼馬はん・・・いきなり・・・まあええわ膝枕つちゅうつかや・・・

・」

そう言つと花蓮は蒼馬の頭を優しく撫でて
静にテレビを見ていた・・・

(ん？俺は寝てたのか・・・時間は・・・9時・・・2時間寝てたか)

「蒼馬はん・・・おはようさん」

「ん？おはよう・・・よく寝たな～」

「気持ちよ～寝れたか？」

「うん・・・いつもより気持ちよく寝れた気がする」

何故か花蓮は顔を赤くしている・・・。

「膝枕やつたんけど・・・ビリやつた? (／＼＼)」

「あ～気持ちよかつたよ～って膝枕なのか! ?」

「そりだよ～やって欲しかつたらいつでも言ってな～」

そう言つと花蓮は鼻歌を歌いながら部屋を出て行つた

(マスター 思考回路停止中ですか? 気持ちいいならもう一度! つて
言え～ば・・・)

(空馬・・・空間破壊者の前にお前を・・・)

(調子乗つてました! すいません)

(マスター も罪な人間だ・・・)

俺は晩飯を食べに行き・・・また部屋に戻ると
何故か有紗がいた・・・

「蒼馬君・・・花蓮の膝枕気持ちよかつたんだね・・・」

「な! 何故知ってるんだ?」

「花蓮が自慢してきた・・・」

「・・・・・・」

(有紗さん怖いです! 黒いオーラが・・・)

(まだ死にたくない・・・)

「蒼馬いる～?」

最悪のタイミングでフェルガがやってきた・・・

「蒼馬・・花蓮から聞いたよ・・・

「お前もか・・・・・」

一人が声を揃えて言った。

「「私達に膝枕して（／＼／＼）」「

ん？何か違うような気がする・・・
して？・・・でも断れる雰囲気じゃない・・・いいか

「はい、分かりましたよ、お嬢様達・・・

「やつた」「

」うして俺は一人を膝枕することになった・・・足痛い・・・。

「にやはは～気持ち良すぎて・・・眠く・・・」

「んぐ眠いよ・・・」

一人は眠ってしまった・・・。

「はあ～まあいいか・・・まつたぐ」

蒼馬はそう言って一人の頭を撫でて座った体勢で寝ることにした

三人が目覚めたのは1時間後蒼馬の足は痺れてる・・・
空気を読まず警報が・・・

「空間破壊者出現　陸・空部隊出動」

「行くか・・・二人とも行くぞ！」

「「うん！」」

俺達は空間破壊者に居るポイントに向かつた各自分かれで行動
俺の向かつたポイントに一人の怪しいフードの男がいた・・・

「管理局か・・・潰す！」

「お前が潰れる！」

このセリフ的に空間破壊者か・・・

「黒火弾！」

「紅風車～飛燕！」

黒い火の弾と俺の斬撃は相殺されず斬撃が
火を弾を切り裂いた・・・弱いのかこいつ？

「メンガボルト！！」

「紅鳳凰波！」

「ド、ゴ――ン！！

雷と衝撃波は相殺され破壊者は次の攻撃にはいるが・・・

「蒼馬飛燕・・・」

「な？なに！？」

背後に現れた俺の攻撃に反応出来ず直撃・・・けつこう弱いな
言つほどの実力も無かつた感じだ

「くそ！空間召還！ゴブリンナイト！」

そう言つと空間破壊者の体は消えて
鬼みたいな騎士が現れた・・・

空間召還

モンスターを召還しシンクロすることで
モンスターの意識をのつとり同化することが出来る
モンスターが死ぬと本人も死ぬ

「ふふふ・・・死ね！！」

「蒼狼天一閃！」

突進してきたモンスターを切り裂くが
本体は斬れず盾が斬れた

「は、速いな・・・くそ！」

「雑魚に用は無いんだ！蒼龍天王斬！」「
な！グアアアア！」

モンスターは蒼き龍の斬撃によつて消滅・・・
モンスターが消滅したことにより本人も消滅した・・・

「蒼馬はん大丈夫か？敵は全滅やお疲れ様」「
ああ・・・戻るか・・・」「

こうして空間破壊者との最初の戦闘は終了し
本局へ帰還した蒼馬だった・・・

第十四話 空間破壊者（後書き）

作者「蒼馬君ばかり……罪な野郎だ！」

蒼馬「蒼龍天王斬！！」

作者「ギアアアアアア……」

蒼馬「逝つたか……」

蒼馬「まあ俺が終わらせるか……」

作者「まだだ！逝つてないぞ！」

蒼馬「まだ生きてたか……まあいいや」

作者「いいんだ……それでは！」

作者「皆様からの評価・ご感想・アドバイスなど待っていますm - m」

作者「次回も見てやってくださいm - m」

第十五話 破壊者 王我（前書き）

見事空間破壊者の撃退に成功した蒼馬達
空間破壊グループ王の手下らしい
最近活発に動いているグループ王
蒼馬とベルが上空を捜索していると
王我と名乗る奴が現れた！！！

第十五話 破壊者 王我

「お前が次元の使いつて奴か・・・」
「なんで知ってる!?」

「王我君か・・・空間破壊者だよ」

王我 道

空間破壊グループ王のリーダー ランクS
武器 手袋つぽいの 見た目・・・金髪のスー サイヤ人みたい

「空間破壊者か・・・なら!」

「貴様が勝てると思うなよ」

「僕も一応居るけども・・・」

ベルは観客になるらしい・・・

蒼馬VS王我的戦い

「開始早々戦闘パート2か・・・」

「何無駄事言つている・・・行くぞ!」

王我に武器は見られない・・・素手か?魔法か?

「獅子爆拳!」

「紅風車〜天魔!」

拳の戦いか!蒼馬は刀だが王我是魔法使つこと無く接近戦で挑んでくる

「甘いな・・・獣咆哮撃!」

「蒼虎死合！」

拳を突き出す拳圧と刀を振つて出来る風圧の
ぶつかり合い・・・

「ほゝ少しは歯ごたえあるか・・・」

「まだ肩慣らしだろ！？コニゾン！」

「調子に乗るのも今のうちだがな・・・」

そう言つと王我が黄色い魔力を体に纏わせた
・・・完全にスー サイ 人だ・・・

「奉天波動！」

「蒼狼天一閃！・！」

激しい技の打ち合い・・・

王我にはまだ余裕の表情が見られる・・・余裕なのか？

「ふ！どうした鈍つているぞ・・・獅子慘天拳！」

「舐めるなよ！蒼龍天王斬！」

ドゴー——ン！――

「ほほほまあまあだな・・・朱雀撃波弾！」

「くつ！紅鳳凰波！」

相殺・・・相殺・・・互いの技は相殺されていくばかり
しかし・・・王我がしかけた

「ふ！もう飽きた・・・堅守獅子拳」

「なー?速い・・・フルゴニゾンー!」

とつさの判断でフルゴニゾン

「ほ~それが・・・」

「紅蒼^{ゼノン}に輝く夜天^{フォース}の刃!!」

「なかなかだな・・・だが!」

王我が言つと田の前から消えた・・・
速い動きに蒼馬に一瞬隙が生じた・・・

「ふ!神技の中の神技を見せてやる!」

「な!?

王我が王と呼ばれる異名の元になつた技

「武王^{キングダム}の破壊^{ブレイク}撃^{アタック}」

「な!紅龍巻!」

王我の放つた武王の破壊撃^{ブレイク} 全身の

もの凄いオーラを纏わせ渾身の正拳突き・・・

紅龍巻で防御しきれず破壊され拳風で吹き飛んだ・・・

「ぐ~ガハア・・・くそ・・・」

「ふ・・・終わりだな・・・次元の使いよ・・・」

意識が・・・いや・・・しかし!

神技なら・・・神技で・・・いけるのか?

行くしかないと思った蒼馬刀を両手に魔力を溜める

「キングダム ブレイブ

「武王の破壊撃」！！

「真・絶対勝利の魔剣」！！！

「エクス カリバー

「」

神技と神技のぶつかり合い・・・

しかし！長さのある蒼馬の攻撃が王我に直撃したが
王我是倒せず蒼馬を殴った・・・

「くー？・・・まだ生きてたか・・・」

「・・・！」今までやるとまな・・・面白い・・・」

そう言つと王我是背を向けてどこかへ飛んでいった

「強くなれ！俺を倒せるくらいの実力を身につけてから挑め！待つ
ているぞ・・・」

「く・・・まだ勝てないか・・・」

消えそうな意識で王我の言葉を受けとつた蒼馬
まだ自分では勝てないと再認識し

フラフラしながらも本局へ戻り

今日一日を振り返りながら眠ろうとしていた

（強かつたな・・・俺も強くならないと）

（王我に勝てるようになれると思いますか？）

（ああ・・・いや・・・ならなきやいけない）

俺がやらないで・・・誰が倒すんだ？

俺はあの人には勝ちたい・・・王我道に・・・

(「真・絶対勝利の魔劍」を過信しすぎたかな?
（いえ・・あの技は凄いですが・・・他の技を磨きましよう）
(紅桜蒼天流・・・兄貴がいれば・・・いや・・・頑張ろう!-)
(その意気です!マスター!-)

王我道との戦闘で改めて自分の実力の無さに気づいた蒼馬
王我に勝つため気合を入れなおし
紅桜蒼天流に磨きをかけるのであった・・・

第十五話 破壊者 王我（後書き）

作者「蒼馬君頑張つてね」

蒼馬「お前も頑張れよ・・・」

作者「うん・・・頑張りますw」

蒼馬「兄貴の出番あるのか?」

作者「さあ～分からぬいww」

蒼馬「まあ頑張つて修行だ!!」

作者「そうだね!それでは!」

作者「皆様からの評価・感想アドバイスなど待っています!! - !!」

作者「次回も頑張ります」

第十六話 紅桜蒼天流（前書き）

王我との決戦から一週間

蒼馬は己を磨き技を磨き修行していた

周りから見れば急成長 自分から見ればまだ未熟

そんなとき空間破壊者が本局に向かってきていると言つ

連絡が来たのだ・・・

第十六話 紅櫻蒼天流

「相手は一人・・・蒼馬・・・いけるか?」

「はい!」

「一応援軍は出す・・・無理はするな・・・

「はい」

相手は空間破壊者一人

蒼馬一人で挑むことにした・・・何故敵は一人なのか・・・

「確か・・・この辺つてあれか・・・」

上空を漂う一人のフードを見つけた・・・

「井上蒼馬・・・だな?」

「だつたらどうする?」

「始末する・・・」

「こっちのセリフだ!」

空間破壊者だつた・・・
いきなり襲い掛かってくる破壊者
前回の奴をはしりが違う・・・

「紅風車～天魔！」

「バイシスライン！」

相手の手か雷属性の棒っぽいのが飛んできた
天魔と相殺すると思ったが天魔のほうが強かつた

「なに！？王我からの話ではこんな強さじゃー…？」

「余所見してる暇あるか？蒼馬飛燕！」

後ろからの不意打ち攻撃に反応出来ていないと
破壊者・・そのまま崩れ落ちる・・・

「ぐ！・・・まだだ・・・威綱！」

「紅鳳凰波！！」

今度は相殺された、相手は蒼馬の噂以上の実力に
少し驚いている・・・チャンスだ・・・

「ゴンゾン！蒼龍天王斬！」

「くそ！空間召喚！・・・ゴーレム！…」

「なつ！？」

奴の空間召喚と言ひセリフの瞬間に

巨大なまるでガダムのような・・・石像が現れた

「嘘だろ・・・・・」

「は～はつは・・・これがゴーレムだ死ね！…」

「くつ…」

巨大な拳から放たれるパンチ

これを喰らつたら・・・考えたくない

(フルユニゾン！いくぞ！)

(OKマスター・・・フルユニゾン！)

「ほゝそれが噂の・・・
「蒼狼天一閃！」

「ゴーレムの腕は斬つたと思ったが・・・

「甘いんだよ！」

「斬つたところが・・・再生していく

「嘘だろ・・・再生なんか出来るのかよ」

「貴様で勝てん！おらあ！」

「くつ！紅時空両断！」

「斬つても斬つても再生していく・・・

「剣じや勝てないんだよ・・・」

「お前・・・紅桜蒼天流を舐めすぎだ・・・

「なに！？」

紅桜蒼天流はどんま相手でも対処可能な剣術
相手が再生するなら・・・

「紅爆碎裂斬！」

「な！？」

「ゴーレムの体に亀裂が入り・・・バラバラに砕け散った
これなら・・・

「甘いな・・・分離再生！」

「ちつまた再生かよ！」

「ゴーレムはまた元の姿に戻っている

「言つただろ貴様では勝てないと……」

「まだだ・・・紅鳳凰波！」

「ゴーレムの体の核が吹き飛んでいく……中心に何かるー?」
核つて感じのやつか……
蒼馬はそう判断した……

「これで終わりにしてやる……」

「再生するゴーレムを倒せると思つなよー。」

(出来ればやりたくなかったけど……)

蒼馬は刀に魔力を溜め……

「真・絶対勝利の魔劍!!!
エクス カリバ」

「神技か・・・再生する体は不滅だ!」

「ゴーレムの体を縦に両断した……
体の中のオレンジっぽいのも斬れた

「なー? 核に・・・気づいていたか……」

「ああ・・・・終わりだ・・・」

「くつそ・・・・・」

「ゴーレムは海に崩れ落ちていった……

空間破壊者を倒したて本局へ戻つた蒼馬
疲れたので寝ようとしてたら・・・

「蒼馬は～ん遊びにきたで～」
「花蓮か・・・どうしたんだ?」
「蒼馬の心の声が膝枕して～って言つてゐるから来たんや
「言つてません・・・」
「・・・・言つた・・・」
「・・・・言つた・・・」

なんか潤んだ可愛い顔で「ちりを見られたら・・・

(マスターの選択肢は)

- 1 お願いします
- 2 よろしくお願ひします
- 3 んじや頼む
- ・・・・です

(拒否権無いのか・・・しそうがない)

「んじや花蓮・・・頼む」
「まかせないわ」

花蓮の膝枕で1時間ほど眠ることになった・・・

「可愛いな～蒼馬はん・・・」
「～～～・・・」

その後眠気覚ましに有紗とフェルガに取調室で
1時間ほど何故かお説教を受けていた・・・

第十六話 紅桜蒼天流（後書き）

作者「・・・羨ましい」

蒼馬「蒼狼天一閃！」

作者「甘い！飛天 流 天翔 閃！」

蒼馬「なつ！？作者のくせに！」

作者「まあ邪魔な蒼馬君は置いといて・・・3人にインタビュー」

有・フエ・花「「「はい」「」」

作者「蒼馬君をどう思いますか？」

有紗「強いし・・・かつこいいかな～」（／＼／＼）

フェルガ「戦つてる時・・・ボン！」（／＼／＼）

花蓮「かつこええわ～」（／＼／＼）

作者「蒼馬君から告白してきたらどうしますか？」

有紗「え！？あ～その・・・OKです」（／＼／＼）

フェルガ「え！？・・・ボン！！」（／＼／＼）

花蓮「OKするわ～（／＼／＼）」

作者「ありがとうございました・・・」

作者「蒼馬君斬首だね・・・それでは！」

作者「皆様からの評価・感想・アドバイスなど待っていますm-m」

作者「次回もよろしくです」

第十七話 神能力（前書き）

更新遅れてしまつて・・・
すいませんでした・・・m - - m

王我を倒すべく修行中の蒼馬

いつもどおり修行を終え
寝ていたのだった・・・

第十七話 神能力

「もしも～～～し

「・・・女神さん？」

寝たはずの蒼馬・・・

夢の中に女神様が現れたのだ・・・

「蒼馬君に力を与えたいと思つます」

「いきなりですね・・・」

「気分ですかえい！」

女神様の手から光の玉が出てきて
俺の体に入ってしまった・・・

「あなたの創造通りの力・・・頑張つてくださいね
創造通りの力？なんですかそれ！？」

女神様は消えてゆき・・・
視界も・・・

(マスター～マスター)

空馬の声で目を覚ました俺

夢での話しさは真実なんだろうか・・・

(空馬・・・朝早いが練習行つてもいいか?)
(え?こんな早くからですか?)

(ああ・・・試したことがあるんだ・・・)

(やうですか・・・行きましょう)

蒼馬は女神様から貰つた新的能力を
解明&試すべく練習場所へ向かつた

(創造する力か・・・俺の創造する通りの技が出るのか?)

創造する・・・自分で頭で思い浮かべた事が現実になる?
武器や技が出るのか?・・・やってみるか・・・

「んじや・・・エクスカリバーの名前の由来・・・」

蒼馬は頭の中で黄金に輝く剣を創造した・・・

「約束された勝利の剣!!」

「約束された勝利の剣」

湖の精から授かった、至上の聖剣。人々の「こうあつて欲しい」
という願いが形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻
想」。セイバーの使っていた宝具だ・・・

ズバアアーネン!!

「本当に出来た・・・嘘だろ・・・アニメ」

出来てしまつた・・・想像した通り・・・

頭の中で思い描いたアニメの技が出来るなんて・・・

(マスター凄いです!いつこんな技を!?)

(いや・・・)

「武器を創造出来るのか？・・・
やつてみるか・・・・

「創造・・・・来い！ロトの剣！」

伝説の勇者が使用していた剣・・・本当に
武器まで出せるなんて・・・

（マスター、凄いです！）

（なんかチート戦士になつた気分・・・）

蒼馬は創造した技・武器が使用可能・・・
まさにチート能力だ・・・・

「一回部屋に戻るか・・・・」

今日は有紗との練習戦闘・・・・
新能力を実戦で試す・・・・いい機会だ

時は有紗との練習戦闘まで進み・・・・

「蒼馬君！負けないよ！」

「じつちだつて・・・・負けない・・・・
では・・・・スタート・・・・」

新能力を試すか・・・有紗・・・すまん

「エクシードバスター！！」

「当たらないよ！」

エクシードバスターを難なく回避し・・・構える・・・

「な！なにあれ？見たこと無いよ～」

「秘剣・・・燕返し！」

アサシンの持つ唯一構えのある技多重次元屈折現象を応用し全く異なる軌跡を描く三つの斬撃を同時に繰り出す技

「！？ディフェンドバリア！」

「その程度なら・・・破る！」

有紗の盾を燕返しの斬撃が破壊・・・有紗に直接的ダメージだ・・・

「きやあ！・・・うう～強い・・・」

「まだだ・・・刀幻鏡！」

刀を地面に刺し無数の武器が地面から生えてくる技

「なにこれ！？くつ！アクセルストーム！」

「まだだ！武器創造・・・ロトの剣・・・ギガブレイク！！」

剣に魔力を纏わせ斬りつける技

アクセルストームと激突し・・・有紗が気絶した

「いやほほ～強い・・・」

「勝負ありー蒼馬君の勝ちー！」

女神様から授かった力は・・・
とんでもなく強い力だった・・・

第十七話 神能力（後書き）

作者「蒼馬君が神になつた・・・・」

蒼馬「アニメ好きが・・・こんな能力を・・・」

作者「強すぎるね～卑怯だ～」

蒼馬「蒼龍天王斬！～」

作者「ガハア！・・・」

蒼馬「更新してなかつたお前がホザクナ・・・」

作者「すいませんでしたm - - m」

作者「皆様からの評価・感想待つてますm - - m」

作者「駄文ですが・・次回もよろしくですm - - m」

外伝 蒼馬紹介（前書き）

蒼馬君とベルの現在の
能力と実力の紹介です。
十七話以降の能力値

外伝 蒼馬紹介

井上蒼馬 男 14歳 171cm

主な武器 長刀 紅蒼閃刀 短刀 狼蒼疾風 + 創造武具
紅桜蒼天流 九代目当主

現時点 魔力ランク SSS+ L▼5 能力「クリエイター」
クリエイター」
属性 炎&水 パートナー 空馬

普段の髪の毛の色は蒼色 ユニゾン後は紅色
瞳も髪の毛と同じ変化

最初の時点から創造能力を手に入れてチートな感じの力の持ち主
マイペースでアニメ好き 刀の手入れが趣味

「クリエイター」
武技創造」

能力持ち主の頭の中で創造した技・武器を作り出す技
オリジナル技・武器や知っている技・武器を作り出せる
しかし 蒼馬の魔力値以上の物は作り出せない
能力を使いすぎると頭痛が起きる
武器と技以外は作り出せない

ベル 男 年齢不明（蒼馬と同じぐらい） 174cm

主な武器 無し 生み出した武器を適当に使用 神召喚者

魔力ランク EX アルマロス
「ファンタズナ・ドリーム」
幻想と夢の扉」

髪の毛は黄金色 瞳は 紅色

気分屋でのんびり性格 実力はあるが戦う気が無い

神召喚者の称号を持つ

神召喚者

召喚者の頂点に立つものに与えられる称号

神をも召喚することが可能である（認められた神のみ）

「神物^{アルマロス}作成」

創造した物なら何でも作り出せる

物理法則も変える物も作り出せる 武器・技・生命体ナド作成可能

しかし能力値の凄い物を作り出すと自分へダメージが来る

「幻想と夢の扉」^{ファンタズナ・ドリーケア}

空間移動 時限移動 錬金術 心理把握 覚醒が使用可能になる
この世界で上位に入るぐらい危険な能力である

外伝
蒼馬紹介（後書き）

作者「一人共チートじゃん・・・・・」

蒼馬「女神様最強なんじやないか？」

作者 ああじ 確かに

蒼黒 - ヘ川の能力は反照たな」

作者 - 反則たね

蔵馬の持なりて何ぞありと同様に

卷之三

作者「駄文ですが・・・次回もよろしくです m - - m」

第十八話 騎士の戦い（前書き）

武技創造能力を手にした蒼馬
有紗との練習戦闘で能力を試し
自分の能力の凄さを知った蒼馬
今日はエコーズとの戦闘だ・・・

第十八話 騎士の戦い

王我との決戦を残り一週間に控え
いつも以上に修行に熱を入れる蒼馬
今日烈風の剣士との二度目の戦いだ

「蒼馬！早くやるぞ！」

「もう少しぐらい・・・寝たかったな・・・」

朝早くから訪問し戦闘の申し込みをされた蒼馬
断ることも出来ず・・・

「ルールは前回と同じいいな！」

「ああ・・・はい」

「蒼馬君、頑張つて〜」

(マスター頑張りましょー！)

(なんで・・・俺以外気合入ってるんだ?)

場所は陸の試験と同じ街ステージ

時間は無制限 気絶。魔力切れで終了

「では・・・いくぞ！」

「じつちだつて！」

先手必勝とばか突進してくるエコーズ
甘い・・・

「紅風車、天魔！」

「烈火豪衝！」

「くつ！さすが・・・コニゾン！」

「ほ～もうコニゾンか・・・」

エコーズさん相手に手加減は出来ない

武技創造使うとしても苦戦・・・するかな・・・

「蒼龍天王斬！」

「震裂凍破斬！..」

またも相殺・・・剣術は恐らくエコーズのほうが上
ならば・・・

「インビシブル・エア
風王結界！」

幾重にも重なる空気の層が屈折率を変え、その対象を不可視のも
のとする

「な！？刀が・・・見えない！？」

「ストライク・エア
風王鉄槌！..」

「！？風か？・・・ガハア！」

打ち出した風がエコーズに直撃
刀が見えなくて油断したのか・・・

「くつ！烈風我一閃！」

「紅時空両断！..」

(マスター長距離攻撃は苦手ですか?)

(ん~接近戦しか・・・無理かも・・・やつてみるか)

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」
破道の三十一 「赤火砲」！！

エコーズに向かつて火塊を放つた
本当に出来た・・・

「くつ・・・その程度！斬魔烈火閃！」
「まだだ！雷法！」

エコーズは火塊を斬つたが雷法による
落雷を回避出来なかつた

「ぐー？・・・接近戦だけでは無いか・・・」
「馬鹿じやありませんよ・・・！」

エコーズの身にまとう霸気が・・・
いつもより威圧感が・・・凄い

「行くぞ・・・烈閃双陣」

エコーズの周囲に炎が・・・円のようない
結界のような感じだ・・・

「凄いですね・・・それ
「まだ力を見せてないだろ・・・炎斬飛燕！」
「な！？紅風車／疾風！」

斬撃と斬撃のぶつかり合い・・・

しかし！ ハーネスの斬撃は止まる』となく・・・

「くそー!? 羅生門ー!」

巨大な壁で斬撃を防ぐ・・・
しかし止まらない・・・

「さすがエコードさん・・・王の財宝」
ゲート・オブ・バビロン

持ち主の蔵と空間を繋げる能力を持つ。

王の財宝でそれらを空間を繋けて自在に取り出したり射出する
ことなどが出来る。

「天の鎖よ！」
エルキドウ

神を律する黃金の鎖

「蒼龍天王嘶！」

「舐めるなーー！ 霸氣爆烈ーー！」

ドーナツ---

「はあ・・・はあ・・・やるな・・・」

「さすが・・・エコーズさん破壊するなんて」

想像以上の実力だ・・・
だが・・・これで終わりだ

「行くぞ！・・・霸王斬滅剣！・・・

「蒼王朱雀霸天斬！・・・」

蒼色に輝く朱雀を飛ばす技

ドゴー——ン！

「くつ・・・また負けたのか・・・」

「なんとか・・・勝ったか・・・」

Hマークの勝利後アレックスに呼ばれていた蒼馬

「君にそんな能力あつたか？」

「女神様からいただいた能力です・・・」

「女神？まあよくわかんないけど・・・いいか」

適当な感じで会話は終了し・・・蒼馬は部屋に戻った

(マスターH我と戦うのですか？)

(ああ・・・もう少し強くなつたらな・・・)

「蒼馬君へ失礼するで～」

「失礼するなら帰れ」

「しつ・・・危ないわ～真似するなんて・・・」

やつてみた・・・

いつも花蓮がやつてる」と・・・

「蒼馬～ここに来たと言つことは・・・
分からぬから寝る・・・・・」

蒼馬は花蓮を無視して眠ってしまった

「ふふ・・可愛いな～」

何故か起きたら花蓮が膝枕していた・・・
その後有紗とフェルガと理由を尋問されていたのだった・・・・

第十八話 騎士の戦い（後書き）

蒼馬「終わり方……なんか微妙」

作者「…………すいません」

蒼馬「なんかチート戦士になつたな……俺」

作者「武技創造なんて……強いね！」

蒼馬「まあ強いからいいさ」

作者「だね～それでは……」

作者「皆様からの評価・感想など待つてます――――」

作者「駄文ですが・・次回もよろしくです――――」

第十九話 破壊者の巣（前書き）

いつも通り修行をしていた蒼馬
武技創造能力にも慣れてきたところ
空間破壊者の拠点らしき場所が発見されたので
任務で向かうことになった・・・

第十九話 破壊者の巣

空間破壊者の拠点潰しの任務
俺と有紗とエコーズのメンバー

「けつこうな数居ると思つけどな・・・」

「大丈夫だよ～～きっと」

「うむ・・・見えたぞ・・・あれだな」

山奥に城っぽいのがある

これが空間破壊者達の拠点の一つ

「城ごと潰すか・・・」

「他の拠点の手がかり見つけたらだよ」

「私は侵入しよう・・・外は任せた」

エコーズが城に侵入

俺と有紗が城外を探索・・・

「いきなり戦闘な予感が・・・」

「「「侵入者発見！」」

「いや！？見つかったよ～」

蒼馬の勘は見事に当たり見つかってしまった

「報告される前に叩く！蒼馬飛燕！」

「ランドショート！」

城に聞こえないように音を立てずになんとか

倒すのに成功した二人・・・だが

「管理局か・・・」

(こいつ・・・さつきの奴らとは纏う空気が・・・)
(・・・幹部でしょうか?)
(たぶんな・・・)

黒いタキシードっぽい服に
杖を持っている男・・・

「潰しますか・・・土龍突進!」
「龍か!?なら・・・蒼龍天王斬!」

魔力の龍のぶつかり合い
しかし・・・2:1・・・有利だな・・・

「エクシードバスター!」
「紅風車! 天魔!」
「土壁城壁!」

相手の土の壁に防がれる
相手の属性は土か・・・

「なら・・・武器創造・・・甲縛式O-S-黒雞・・・」

術者の身を守りながら戦う鎧のような武装
ハオが使用する甲縛式O-Sだ・・・炎属性
この世では魔力を消費か・・・使いやすいな・・・

「なんだそれは・・・刀使いだと聞いているが・・・」
「さあ～な・・・鬼火！」

黒雞の背中にある一本の蠅燭から出される超密度の炎弾

「くつ！土壁城壁！」

「その程度では鬼火は止められない！」

ド、「――――――！」

「くつ・・・なんという破壊力だ・・・」

「エクシードバスター！――」

「くそ！土壁城壁！――」

(召喚魔法の前に倒すか・・・)
(召喚前にですか・・・どうするんですか?)

威力があるからな・・・結界でいける技

・・・あれをやるか

「アンロミニアッヂフレイム・ワーカス
無限の剣製・・・」

鍊鉄の固有結界。目視した武器・刀剣を結界内に登録し複製、貯蔵する。

結界内に登録した剣や、目指した武具を複製出来る 英靈アーチャーが使用していた技

「――・・・――は・・・結界か！？」

「武器創造・・・・行け！――！」

大量の刀や剣・槍などの武器が相手に向かつて飛んでいく
とてつもない数だ・・・

「くつ！土城守備陣！！」

防いだか・・・だが！」

普通に当てるだけでダメなら！

爆発もだ！！

「壊れた幻想！」ブローカン・ファンタズム

また同じことを……土城が、備後……」

ドーナツ!!

飛んでいく宝具達は爆発を起こし
敵の守備魔法をも破壊し・・・

「凄いや・・・私の出番無かつた・・・」

一 やれやれたな

(マスター敵の反応です！多いです！)
(思いつきりやりすぎたか・・・)

今の戦闘で敵さん達が気づいたらしく
30人ほどの破壊者が向かってきた・・・

「そ、蒼馬君どうするのー?」「倒すだろ・・・やるか・・・」

」の数相手か・・・皆雑魚ならうれしいけどな
30人・・・やるか・・・

「有紗一発凄いのやつてくれ！砲撃だ！」
「え？当たらないよ～・・・わかつたよ～」

あの数に当てるには敵の動きを封じるか・・・
やるか・・・

「軍相八寸退くに能わず・青き門　白き門　黒き門　赤き門・相贖
いて大海に沈む！」
「四獸塞門」

相手の前方に“竜尾の城門”、左に“虎咬の城門”、右に“亀鎧の城門”、上に“鳳翼の城門”という四種類の壁を発生させ、その壁で作られた直方体の結界で相手を閉じ込める鬼道。かなりの強度を誇る。

「「「「なんだこれは！？」」」

(いい反応してますね～)

(まあ当たり前だろうな・・・後は・・・)

相手の動きは封じた・・・後は

有紗の砲撃がどれくらい威力を出してくれるかだ・・・

「グランド・オブ・ザ・バスター！――！」

とんでもなく大きい砲撃魔法

四獸塞門の中に入っている破壊者はたぶん全滅だろうなーと思わせる一撃

「有紗・・・すごいな・・・」

「活躍するもん！たまあ～には」

空で凄い煙が巻き起こっている・・・

しかし・・・一人の影が見える・・・

「全員雑魚では無いみたいだな・・・有紗は休め」

「え！？・・・うん・・・・」

あの砲撃を耐えるほどの実力・・・
幹部つてやつだな・・・

「君が・・・次元の使いか・・・今の一撃は凄かつたな
体力は・・・もう無いかな？」

「ふつ・・・貴様を倒す力は・・・あるな
・・・お前じや倒せないよ・・・たぶんな」

今の砲撃を耐えて俺を倒す力があるか・・・
やつぱり幹部つてやつだな・・・

「我が魔術の奥義だ！・・・グラビティダーカー！」

「魔術か・・・ならば・・・」

凄い大きな重力玉・・・

魔術ならば・・・打ち消せるかな・・・

「幻想殺し・・・」
イマジンブレーカー

シユパアーナン・・・

蒼馬の右手に当たつたグラビティダークは消えた・・・打ち消されたのだ・・・

「な!? 何故だ!?

「終わりだ・・・蒼龍天王斬!!」

「くそ!!! グハアアアアアア!!!」

幹部に技は直撃し・・・落下していった・・・

「蒼馬情報は手に入れた・・・拠点を落とすぞ!!!」

「エコーズか・・・分かつた落とすか・・・」

「でも・・・こんな大きな城破壊するには魔力使つよ〜」

二人共魔力を消費してゐる感じで無理そうだ・・・
俺も頑張つて・・・やるか

「ゲート・オブ・バビロン
王の財宝・・・出て来い乖離剣工ア」

「蒼馬君無理だダメだよ~何するか知らないけど・・・」

「まあ大丈夫だ・・・」

そう言つて三人で城の真上に移動して・・・

「エヌマ
エリシュ
天地乖離す開闢の星!――!」

空間切斷。風の断層は擬似的な時空断層までも生み出すギルガメッシュの使用した究極の一撃だ・・・

ドゴオ――――ン!――!

「なつ！？・・・嘘だ・・・」

「蒼馬君・・・城が・・無いよ」

二人は啞然としていた・・・目の前にあった城が
消えている現実に・・・

「任務終了・・・帰るか・・・」

こうして任務は終了し

一人に今日の技のことを説明しながら局へ戻つて行つたのだった・

第十九話 破壊者の巣（後書き）

作者「強すぎると……チートだ……」

蒼馬「確かにやりすぎだ……」

作者「まあいいや～かつこいいから……」

蒼馬「戦闘ばかりで疲れた……」

作者「休まないとね～お疲れ様」

蒼馬「紅桜蒼天流が……薄くなつていいくような……」

作者「気にしない！それでは」

作者「皆様からの評価・感想待ってます……」

作者「次回もよろしくです……」

第一十話 王我の右腕（前書き）

破壊者の拠点を破壊し

局へ戻つた蒼馬達 王我の居場所もつかみ
その場所へ向かうのだった・・・

第一十話 王我の右腕

前回の拠点破壊作戦でエコードが王我の居場所の情報をつかんだ
王我是山奥にあつた城から近い場所に身を隠していた
蒼馬一人で決戦したいと言う蒼馬・・・
王我との一騎打ちのため 王我の隠れ家へと向かう

「いじらへんだな・・・」

（マスター魔力反応あります！）

（王我の反応は！？）

（ここからでは分かりません・・・）

反応が分からないので蒼馬はボロボロの城の中に
進入していった・・・

「ボロボロだな・・・」

「ボロボロとは失礼だな・・・」

「なつ！？」

入り口の扉は閉まり扉のほうから声がする
城の中は真っ暗確認は難しい・・・

「残念だが・・・王我様では無いよ・・・」

「王我はどこだ？・・・」

「ここで死ぬ君に言つたつて意味無いだろ」

相手が言つと城の中は明るくなり
人が確認出来る明るさになつた・・・

「死ぬのは・・・貴様だ！！」

「ふつ・・・・戯言を言つなーーー！」

敵の武器は槍？・・・薙刀のような感じ
蒼馬と1・1で挑む覚悟と実力があるようだ・・・

「紅風車、天魔！」

「デモンランス！！」

お互いの技は激しくぶつかり合い相殺
相手が仕掛けてくる

「デーモンスピア！」

「・・・・虚閃」

ドゴー――――ン――！――

蒼馬の指から放たれた破壊の閃光
蒼馬知るアニメの好きな技だ・・・

「黒虚閃」
セロ・オスギュラス

「くつーーー？」

黒い虚閃さきほどより威力もある技
相手は連続攻撃に反応しきれず直撃した

「やるな・・・クリムゾンダーク！――」
アガアロン
「全て遠き理想郷！」

あらゆる攻撃・交信から対象者を守るこの世最強の守り。それは魔法の領域であり、防御というより「遮断」であるといふ。

「なつ！？防がれただと！？」

「余裕な表情だな・・・蒼龍天王斬！！」

「くつ！？デーモンスピア！」

隙は見せたが反応してくる敵

蒼龍天王斬は相殺されたのだ・・・

「スピリット・オブ・ソード白鶴！」

甲縛式〇・S白鶴のモーテルは葉が昔から心惹かれていた白鳥。

「巨大な剣だな・・・デスランス！」
「はあ～！」

右手が伸びて剣を地面に刺し体を浮かせ回避した

「なつ！？そんなことも？」

「無無明亦無！」

「なつ！？グウハア！」

「まだだ・・・武神魚翅」

雷の力を持つ甲縛式〇・S

「とどめだ・・・雷法・・・」

相手の頭上から落雷

さすがに反応出来ず直撃・・・

「くつ・・・強いな・・・」

「お前に負けるほど弱くない・・・」

蒼馬は勝利したが・・・敵の足元の魔法陣が出現
・・・召喚魔法！？

「来い・・・デーモンキマイラ」

奴の姿は羽があり尻尾もあり・・・虎のよつたな顔の魔獸に変身したのだ・・・

「醜い姿になつたな・・・」

「黙れ！――ウオオオオ――！」

「全て遠き理想郷・・・」

また攻撃を防ぐ・・・そして

「まだ防ぐか！防ぐばかりでは・・・」

「約束された勝利の剣！！」

「なにいい！？」

約束された勝利の剣で切り裂かれた敵さすがに耐えることは出来ず・・・死んだ

「王我の反応はこゝには無いか・・・」

(マスター局から戻れとメールが・・・)
(戻るか・・・)

ひつして戦闘三昧の蒼馬の一戦は終了し
局に戻った蒼馬だった。。。

第一十話 王我の右腕（後書き）

蒼馬「戦闘ばかり……」

作者「それ以外思い浮かばない……」

蒼馬「悲しい脳だな……」

作者「トロト」

蒼馬「まあ頑張れ……」

作者「……（「ククク）」

蒼馬「次回から王我との決戦だったか？」

作者「……（「ククク）」

蒼馬「まあ頑張れ……」

作者「あい……それでは」

作者「皆様からの評価・感想など待っています……」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8647/>

紅と蒼色の幻想 ~ 時空を越えた戦い ~

2010年10月20日08時13分発行